

戦後史ドキュメンタリ 読売争議・われら戦争責任追及せり

作 田丸信堯

▽時 一九四五(昭和二十)年八月から一二月

▽ところ 主に、東京・読売新聞社有楽町別館

▽登場人物

鈴木東民(五十才) 読売新聞論説委員 元同外報部長

鈴木マリオン(一五才 八三才) 東民の娘

志賀重義(四十才) 同資料部次長

長 文連(ちようふみつら 三五才) 論説委員

片山さとし(三九才) 外報部論説委員

山主俊夫(四十才) 整理部次長

武藤三徳(三二才) 經濟部記者

田中幸利(四〇才) 外報部長

坂野善郎(三九才) 同經濟部長

宮本太郎(三五才) 政治部次長

増山太助(三二才) 經濟部記者

綿引邦農夫(五十才) 文選工

吉野玉緒(三二才) 社会部女性記者

谷口桃(一九才) 資料部員

輪転職場 宮沢(三十才)

聴涛克巳(四一才) 朝日新聞論説委員

正力松太郎(六十才) 有限会社読売新聞社長

小林光政(五三才) 同専務取締役

中道佳親(四五才) 同取締役編集局長

三浦薫 (四三才) 同整理部長

徳田球一(五一才) 都労働委員会調停委員

鈴木茂三郎(五二才) 都労働委員会調停委員

末弘巖太郎(五七才) 東大教授 都労働委員会調停委員読売小委員会委員長

読売新聞読者男一、二。読者女性。ほか

▽主な参照及び引用文献。

宮本太郎『回想の読売争議』新日本出版社

増山太助『読売争議 1945/1946』亜細書房

鎌田慧『反骨・鈴木東民の生涯』講談社文庫

東京大学社会科学研究所資料第六、七 『戦後危機における労働争議』一、二

一九四五年当時の『読売報知』『朝日新聞』

戦後史ドキュメンタリー

ドラマ 読売争議・われら戦争責任追及せり

## 第一幕 夜明けの激突

第一景 東京築地本願寺

スクリーン…東京の廃墟の画像。天皇の放送の音が流れて……溶暗。

カレンダー『一九四五年八月二十日（月曜日）』

木製の長机と長椅子が並んだ編集局。『外報部』の木札が机上に置いてある。田中幸利外報部長がひとり、文書を読んでいる。鈴木東民が片山さとしに案内されてくる。

片山（鈴木の鞆を椅子に置きながら）「さあ、着きました。ここがわれわれの仮の職場です」

田中（起立し満面の笑みで）鈴木部長、おひさしぶりです。お元気そうで何よりです」

鈴木（あたりを見回して）「この築地本願寺は石造りだったから、焼け残ったんだね」

田中「西銀座の本社ビルが5月25日の空襲で丸焼けしましてね。いま地下の輪転機を突貫修復中です」

鈴木「有楽町駅からここまで焼けビルばかりでした。駅向こうの毎日と数寄屋橋の朝日は、どうにか健在のようでしたが」

片山「有楽町駅前の別館がどうにか残って、われわれ、9月半ばには引越せるそうです」

田中「岩手からお出でになったのですよね」

鈴木「じつとしておれませんか。でも切符がなかなか取れなくて。待ちに待った戦争終結です。軍国主義者どもが敗れたんです」

片山「列車に、二十時間立ち通しで来られたそうです」

田中「それはお疲れでしょう。さ、どうぞおかけください。鈴木さんが思う存分活躍される時代が来たのですね」

鈴木「いやあ、まず復職させてもらわなくては。そのつもりで出て来ました」

片山「去年の九月でしたよね、検察には退職と言って不起訴にさせ、高橋副社長との社内では休職。みんなそう納得しています。それでいいのですよね」

鈴木「もともとあの逮捕は横浜事件に連座とか、特高警察のでっち上げです。元警察官僚の副社長が多分それを見抜いて、退社と筆を捨てる条件付きで私を連れ出してくれたのだと思います」

田中「今日は正力社長も高橋副社長も、奥の小部屋にいらっしやいます。ま、一息いれて行ってください。何しろこのところご機嫌がよろしくない」

鈴木（腰を落ち着けて）「ところでポツダム宣言を新聞紙面で見ているのだが、あれで全部だよ。ね。例によって大本営が大事なことは隠しているとかは……」

田中「ないと思います。これが原文です。今もこれを研究中でした。どうぞご覧下さい」

鈴木「わが社の社説は『嗤うべき敵の謀略』とポツダム宣言をあざ笑っておった。米英中三国首脳の、世界に発した日本への停戦勧告をだよ」

田中「社長は一貫して本土抗戦論でしたから。本郷台地に徹底抗戦用の地下印刷所を突貫工事中でした」

片山「しかし七月十日の御前会議はソ連に仲介を打診すると決め、近衛さんをモスクワに送るために熊本陸軍飛行場に爆撃機一機を待機させていたそうです」

鈴木「そうですか。日本が降伏の動きを始めてからのポツダム会議でしたか」

片山「ポツダム宣言で、日本は、天皇を残すと一言言っただけだった。しかしポツダム宣言に天皇のことが全くふれられていなかった」

鈴木「なんだって。天皇のポツダム宣言受諾詔書には『国体は護持された』とはっきりある。どういふことだ。宣言以後のこの七、八月、国体とかいう権力者の身勝手のために費やされたのか」

片山「その八月は広島、長崎の新型爆弾もソ連の参戦もありました」

鈴木「われらが新聞は最後まで、戦争政府の応援団でしかなかったようだ」

田中「残念ですが、われわれ、非力でした。そうそう、政経部次長の志賀君や長君は、地下印刷所の工事を止めるよう直訴しました」

鈴木「それはすごい。勇気のいることだ」

田中「われわれ片山君と二人は、ポツダム宣言受諾と決まって社長に進言に行きました。日本の占領は、ドイツのようなすべての新聞の廃刊というような強権発動はない。しかし紙面の民主主義的大転換が要求されるであろうと」

鈴木「あの人に、民主主義的転換と言っただけでわかるのかね」

片山「社長はご苦労、の一言でしたよ。われわれ、クビにすると言われなかっただけ幸いでした。ハッハ」

鈴木「クビ。まさかハッハ。そう、その民主的転換をどうするかだよ」

長、志賀が駆け込んでくる。

志賀「鈴木部長。志賀です。またお目にかかれてうれしいです」

長「お出でになって聞いて聞いて駆けつけました。こうしてお目にかかって本当に戦争は終わったのだと実感できました。政経部の長です」

鈴木「いやあ君たち、無事でなによりだったね」

志賀「もう復帰されたんですよ」

鈴木「今ついたらばかりだ。そんなにせかせるなよ」

長「われわれ、鈴木さんが帰って来られるのを首を長くして待っていたのです。讀賣の今をまとめて頂くのは鈴木さん以外にないと」

鈴木「(満更でもない)また大げさなこと言っただけ」

田中「今社内には揺れに揺れています。当然と言えば当然ですが」

長「政経部の我等二人、社長に進言に行っただけです」

鈴木「突貫工事中止のことかい。今聞いたよ。君たちも志を忘れずやるではないか」

長「あれは八月のはじめでしたか、ポツダム宣言受諾したら、地下印刷所なんて無駄ではないですか」

志賀「そして、社長は自主的に退任されたらどうか。讀賣は最も軍国主義的新聞と思われている。占領軍が来たら閉鎖もあり得る。事前に戦争をあおった主筆や編集局長を更迭しておくのがいいだろう、とも」

長「社長はこう言われました。もし方が一お前たちが言うように敗戦にでもなれば、左翼の連中が革命を起こすだろう。それを鎮圧できるのは警察出身の俺しかない。・・まるで、これからが俺の出番だともいうように自信たっぷりでした。で、翌日、私は記者を外され政経部論説委員」

志賀「私は資料部です。こういう権力づくでやることだけ素早い」

田中「わが社には左翼運動にかかわっていたものがたくさんいますが・・」

志賀「有能でしかも安く雇えると、朝日毎日の記者の半分、いや三分の一の給料でこき使った」

田中「そういう人物が動き始めるのをけん制してのことでしょう」

長「私たちだけでなく、社長お気に入りの安川編集局次長は、占領軍上陸前に一時閉鎖するのが社長の身の安全と泣いて進言されたそうです。自分も南方軍にいたことがあり怖くなって滋賀県に逃げ帰りました」

片山「本土決戦論を連載していた柴田記者は、瀬戸内海の小島に身を隠したそうです」

志賀「何をされるか占領軍が怖い、がこの社長の讀賣も危うい。進退窮まれり、というところですか」

田中「鈴木さん、このポツダム宣言の中心は、軍隊の解散と宣言書の六、『国民をだまして世界征服の挙に出たものの権力及びその勢力は永久に除去される』。ここですよね。第一次大戦のような賠償ではなくて」

鈴木「この六は、世界から軍国主義を駆逐して、平和、安全、正義の新秩序を作るとも言っている。この四月に四六か国集めてサンフランシスコ会議をやった。その精神を盛り込んだのではないかな」

志賀「ここ、十項を見てください。俘虜を虐待したものを含めすべての戦争犯罪人は嚴重に処罰するとあります。処罰の対象者は占領者が決めるのでしようが、それが大問題ですね」

片山「その十の後半が、日本政府に対しての要求になっています。『日本国民の間の民主主義の復活強化に対する一切の障害を取り除け』。いままで政府自体が障害そのものだったんです」

長「だから、それができる政府に取り換える。そうするほかない」

鈴木「the revival and strengthen of democratic tendencies among the Japanese people・・いいねえ。分かりやすく格調もある。それを日本政府にやれという」

田中「日本にも大正デモクラシーと呼ばれた時代だってあったんですよね」

片山「志賀さんは昭和三年の三・一五事件でしたね。長さんも、この私も特高警察に逮捕拷問・拘留の体験者です。私たちも復活強化されるべき民主主義的傾向の、その一員だった。勇氣でますね」

鈴木「世界は第一次大戦から学び、ナチス党や日本の暴走からも学んだ。いま新しい世界に踏み出そうとしている。私はこの一行に、民主主義化日本への反ファシズム陣営の熱い思いを感じるのだよ」

田中・志賀「鈴木さん、どうぞ編集局のこの席へお帰り下さい。ご一緒にやりましょう」

鈴木「では、行つてくるとしよう。まずは副社長にご挨拶・・・」（東民、身だしなみを整えながら奥へ）

志賀「（見送って）あんな方がこれから必要なんです。ナチス批判や重光外相の平和外交を擁護することはあっても、戦争をあおる記事や論説は一本も書かなかった」

和装で決めた吉田玉緒（三二歳 社会部記者）と谷口桃（十九歳 資料部）来る。

吉田「鈴木先生がいらつしやつてお聞きしたのですが」

志賀「今副社長のところへご挨拶に」

吉田「先生、やつぱりおしやれでハンサムでした？」

志賀「日焼けして、精悍になられて」

吉田「まあ素敵。私社会部記者の駆け出しのころ、ドイツからお帰りになった先生にお目にかかりに行つたことがあるのです。ドイツ人の奥様と西洋人形そのままのお嬢さまがいらつしやつて」

谷口「吉田さんは、鈴木部長のことになると目の色変えて自慢話。素敵な奥さまがいらつしやるのですから、憧れても無駄ですわ」

片山「この一年、奥様もお嬢さんも岩手の村でずいぶん苦労されたそうです。ドイツ人なら同盟国のはずなのに、スパイだと言つて石を投げられ、棒持つて追いかけて・・・」

吉田「ご実家でもそうだったのですか。代々お医者様の家柄で、自由民権運動にかかわつて来られたとか。先生は東京生まれなので東民。弟さんは北海道生まれで北民。岩手でお医者様ですつて。もう一人の弟さんは民雄さん。新しい日本にびつたりの家柄」

谷口「もう聞き飽るほど聞かされました。でも素敵な方ですよね」

田中「君たち、三時から社員総会やるつて回覧見たよね」

谷口「そのつもりで来たのですが、あら、こんな時間」

田中「私は鈴木さんを待つことにするよ」

（田中だけ残る。間。鈴木こぶし握りしめ怒りに震えて戻ってくる）

田中「どうなさいました。副社長とはお会いに・・・」

鈴木「君は、仕事を他に求めたまえ」

田中「なんですかそれは。まさか・・・」

鈴木「副社長は、それしか言わない。・・・理由を聞いても何度質してもそれだけをくりかえす。・・・ひとまず、今日のところは、抑えに抑えて・・・引き下がってきた」

田中「・・・よく我慢なさいました・・・」

(社員総会の正力社長の演説が聞こえる)

正力(声)「諸君、われわれは、かかる激変の時にこそ、平常心でなければならぬ。時に乗じて、社内一部の不逞の輩が策動を始めることもありうる。この新しい人事は、これを未然に防ぐためのものである。社長、副社長兼主筆、いずれも留任。専務取締役小林光政新任、取締役兼編集局長中道佳親・・・」

(鈴木、田中、立ち尽くして溶暗)

## 第二景 湯田村鈴木診療所

カレンダー『九月二十七日(土曜日)』

看板『湯田村鈴木診療所 所長鈴木北民 診療 火曜日・木曜日』

野良着の東民、文机に向かって書き物をしている。

思いついて傍の木箱の中から手紙を取り出し読み始める。

東民「(読む) 先日鈴木さんがおっしゃいました。座して弾圧を受けるな。同士を募り策を練るべし、と。そこで去る九月十三日、部次長クラス四二名の署名で進言書を提出しました」

舞台の片方の志賀、片山、長、にスポットあたる。

志賀(文書を読み上げる)「その一、経営の民主化。社長及び社長側近の経営から社員代表と協議しながらの経営に民主的転換を図ること。その二、編集第一主義の確立。通俗的三面記事的販売第一主義から真面目な読者が必要とする紙面への転換。その三、戦争責任の明確化。そのための主筆・編集局長の更迭。その四、待遇の改善・・・」

正力の声「(志賀の発言をさえぎって響き渡る) 諸君の意見の趣旨に異存がない。改善すべきは改善する。しかし戦争責任による更迭の意思は全くない」

片山「・・・社長、それで、おしまいですか」(五人戸惑う。ライト消える)

東民、読むのを止め考え込む。

娘マリオン大きな封筒を持って駆け込んでくる。戸口を開けると突風が室内に。

マリオン(怒っている)「日本人ってどうかしてる」

東民「吹き飛ばされた紙類を拾い集めながら」マリオンだって日本人だぞ。ご苦労さん。郵便局、今日の集配に間に合ったかね」

マリ「ええなんとか。悪かったと思うなら、素直に謝りなさいよ。いつもお父さん、そう言ってたわよね」

東民「何があったんだね。怒ってばかりでは要領を得ないよ」

マリ「私を見かけると『スパイは国に帰れ』って棒持って追いかけていたおじさん、今日はニタニタして話しかけて来るの。ひところのあれはなんだったのよ。戦争に負けたらスパイに

もお追従なの」

東民「ああいう手合いは睨みつけてやり過ぎせよ。もう何もしやしないよ」

マリ「『この敗戦野郎』って言ってやったの。そうしたらしよんぼり行っちゃった・・・」

東民「ハッハ。よくやった。それでいいんだよ」

マリ「よくないでしょう。なんだったんですかあの人たち。あの頃本気でしたよ。だから殺されるかとホント怖かった」

東民「戦争病というか、アラヒト神天皇教というか、長い間熱に浮かされていたんだ」

マリ「熱病かあ」

東民「古くは日清戦争から日ロ戦争、勝った勝ったまた勝った、それ行け朝鮮シナ満州と煽られてここまで連れてこられた」

マリ「『神国日本』だなんて、熱が冷めたらホント、宗教みたいなもんだったのね」

(稲妻とともに雨が降り出した気配)

東民「今年は八月の終わりから次々に台風が来るね」

マリ「神風が思い出してやってきたのよ。この前の枕崎上陸のものすごい被害だったってラジオが言ってた。今夜は東北地方が警戒警報ですって。泣きつ面に台風よ」

風が家を揺する。

マリ「お父さま言ったよね。元が来たのは700年前のことで、今の鉄の軍艦は嵐では沈まないって。私がまだ子どもだったころ」

東民「私が。そんなこと」

マリ「私が元寇の歌、四百余州（しひやくよしゆう）を挙（こぞ）る／十万余騎の敵・・・ってあれ、ラジオに合わせて歌ってたら独り言みたいにお父さまつぶやいたの」

東民「そんな空恐ろしいことを言ったかな」

マリ「言いました。その時私、胸の中にストーンと落ちるものがあったの。納得できたの。でも、決して口に出してはいけない。人に言ったら、お父さまが特高警察に連れてゆかれる、そうおもった」

東民「マリオンに気使いさせたわけだ」

マリ「・・・そうそう、郵便小包が届いてました」

東民「やあありがとう。毎週各社の新聞を集めて送ってくれと頼んでおいたのだよ」

マリ「机を覗きこんで」これって英語よね。アドヴァンス、オブ、デモクラシー・・・」

東民「この前新聞社に行ったとき翻訳を頼まれてね。これからは記者もデモクラシーについて書けるようにとね。イギリスの作家の講演をまとめた二十年前の冊子らしい。東京から呼び出しが来るまでにしあげないとね」

マリ「東京かあ・・・日本語をしゃべれないママは楽しみにしてるけど・・・勝っても負けても、合いの子は合いの子よね」

東民「お父さんが必ずいい学校見つけるよ。ここは畑もあったし患者からのおすそわけもあった。最悪の時に疎開してたと思えばいい」

マリ「もう二度とごめんよ。畑仕事に行くにもお父さまが短刀を腰に差して連れ歩いてくれた、そんな嫌な思いしかない」

東民「マリオンには苦勞かけたね。でもこれからだ。これからだ」

マリ「お父さま戦争負けたら急に張り切ってるわね」

東民「新聞社に戻って、どうして、誰がこんなバカげた日本にしたのか、みんなで考えようと思ってるね」

マリ「お父さまがおっしゃってる戦争責任、軍人の偉い人たちが切腹したりしているけど、あれなの」

東民「あれは宮様総理大臣の言っている一億総懺悔のひとつ。負けて申し訳ない。天皇陛下様にお詫びします、だ。国民に申し訳なかったとはだれも言っていない」

マリ「勝ってたら勲章貰ってたのよね」

東民「領土がほしかった戦争だ。石油やゴムや工業資源を手に入れて世界の大国になろうとした。日独伊三国で世界を分け合おうとしたのだ。他国に軍隊で踏み込んだ権力者の命令責任。その旗振りをした協力者も責任あり、だ」

マリ「ヒットラーはピストル自殺よね」

東民「イタリアはファシスト党総統ムッソリーニが処刑され晒し首になった」

マリ「日本もそうなければいいわけ」

東民「(考えながら) 国民を動員した最高指導者が先ず、被害を受けた国と人々に頭を下げ謝ることだ。そして二度とくり返さないと誓う。・・・そこから始まるだろう。新聞も責任取るべき立場だ。朝日が八月二三日に『自らを罪するの弁』と題した社説を出したが、だから何をどうするとは書いてない」

東民、封筒から新聞を取り出し目を通す。

東民「なんだこれは。・・・(読む) 民主改革なお遼遠 連合国の原動力が必要」

スクリーンにこの日の囲み記事が映し出される。

東民「ワシントンAP特電二四日発 日本の比較的少数の自由主義者たちはすでに政治的革新を目指して指導階級の抛る堅塁に戦いを挑んでいるが、現在のところその効果は少ない。・・・ワシントン政府筋では、もし日本における革命家が既成権力打倒の戦いを開始する場合、マッカーサー元帥並びに旗下軍隊はこれに不干渉的態度をとるべきであると強調している。・・・日本に革命が起こってもアメリカ軍は手を出すなとアメリカ政府。どうなっているのだ、この日本は。手も足も、そう、口も出せないこのざまだ」

(東民、さつきから身をよじっている。背中がかゆい)

マリ「おとうさま、怒ってらっしゃるのそれとも。・・。」

東民「怒ってるさ。しかし。・・かゆい」

マリ「蚤じゃない？ お父さまが東京からお持ち帰りのお土産。・。」

東民「診察室に行ってDDTとかいうの届いてないか聞いておいで」

マリ「そういえばわたし、頭がかゆくなってきた。おじさまが、患者さんが運んでくるとおっ



しゃってた。いやよいやよ。髪の毛洗わなくちゃ。泣き面にシラミ・・蚤。ママア・・」マ  
リオン奥へ駆け去る。

### 第三景 読売新聞有楽町別館三階編集局

カレンダー『十月四日（木曜日）夕』

「編集局長」と書いた木札のあるデスクを真ん中に粗末な木製の机が並んでいる。その一つ  
で志賀が手紙を書いている。離れた別の机で、片山も書いている。

志賀「前略 三木清先生が豊多摩刑務所でお亡くなりになりました。（以下、書いている文章  
を読み上げる声がスピーカーから流れる）独房で発見された時、先生は栄養失調と獄内で感  
染した疥癬が化膿し汚物にまみれてベッドの下で息を引き取っておられたとききました。4  
8歳でした。先生が獄中でいらっしやること、われわれ新聞にさえ知らされませんでした。  
無念です。仮名書きの著述で有名な高倉テル氏が治安維持法違反に問われ氏をかくまったと  
して三木先生は検事拘留処分中であつたとのことでした。敗戦からすでに七週間、われわれ  
は何をしていたのか・・」

片山の声「九月二十七日、天皇がマッカーサーを訪問しました。二人の記念写真が配られました  
が、どんな問答があつたかも知ろん何の発表もありません。写真は岩手日報にも出ているは  
ずですから、ご覧になつたでしょう。貧相な現人神が直立不動、自信満々の占領者と並んで  
いるのですから衝撃的です」

スクリーン・二十九日の写真掲載紙が映し出される  
片山（声）「しかし、掲載は翌々日二十九日付けです。翌二八日の写真掲載紙は、宮内閣が新  
聞紙法二三条違反で発禁処分になりました。そこでようやく占領者が新聞紙法などの存続に気  
が付き、即日規制法規が失効、二十九日掲載となりました」

志賀「（書き続けながら台詞で）三木先生の獄死をきっかけに、アメリカをはじめ外国通信社  
や特派員が動き始めています。十月三日 山崎内務大臣がロイター東京特派員にこう答えま  
した」

山崎（シルエット）「思想取り締まりの秘密警察は現在もなお活動を続けており、反皇室の宣  
伝を行う共産主義者は容赦なく逮捕します。政府形態の変革、特に天皇制廃止を主張するも  
のは、すべて共産主義者と考え、治安維持法によって逮捕されます」

志賀「岩田法務大臣はこうです」

岩田（シルエット）「司法当局としては、現在のところ政治犯人釈放のごときは考慮しており  
ません。陛下のご発意による恩赦以外に釈放はない」  
（山崎と岩田  
消える）

舞台全体が明るくなると、中央に中道編集局長。デスクに渋い顔でふんぞり返っている。  
横に立っているのは、三浦整理部長。対峙しているのは山主を真ん中に、長、武藤、増山ら  
である。志賀も片山も山主のそばによる。記者たち、銘々のデスクで成り行きをうかがって

いる。

山主「私は、整理部次長です。現場は私が任されているはずです。断りもなく差し替えられては、私の立場がありません」

武藤「朝日は見出し三段ですよ。それも、二度目です」

志賀「豚箱の改善を唱えていますよ、三木先生の逮捕の経緯や体調は丁寧に伝えていきます」

増山「警察権力の人権蹂躪問題でしょう。どう考えても、朝日の感覚が常識です」

武藤「三木清先生といえば、著書も数知れぬ著名な哲学者。読売もつい最近までコラムを設けて原稿をいただいていた方ですよ。その方が病気やけがの普通の死亡じゃないんです」

山主「事実を伝える。戦争中の過ちを繰り返さない。それしかないでしょう。理由は何ですか。誰に気がねしてるんですか。答えて下さい！」

三浦整理部長「(中道の横に付き添って)」かかる問題を取り上げるとは国内の相克摩擦を惹起する元である。掲載すべきでない・・・私の判断だ」

山主「だったら預かりではない。記事の抹殺じゃないですか」

中道「ま、君たち、子どもじゃないんだから・・・。こうした問題を記事に取り上げるとは、即、アカにくみすることになる・・・わかるだろう」

三浦「君たち、先刻承知しているように、従来、共産主義者に対しては、国策として撃ち殺してもよいという方針でした」

武藤「あの三木先生が、共産主義者だったというのですか！」

三浦「治安維持法違反で逮捕監禁されたんだ。それで十分だ。終戦によって言論の自由が認められたからといって、にわかはこの種の問題を取り上げるとは、我々の信念としてなし得ない」

片山「昨日の友も、敵の手に捕えられると共産主義者ですか」

宮本政治部記者、文書を手を駆け込んでくる。興奮の面持ちである。

宮本「出ました。六時からのダイク大佐の記者会見、単純明解。要するに、政府が、ポツダム宣言の何たるかをまったく理解していなかったということ。これこそマッカーサー革命」

三浦「なんだ、どうしたんだ。おちついて。その文書渡したまえ」

宮本「項目、読み上げます。『総司令部、日本政府へ以下を要求する。一、内務大臣と特高警察全員の罷免、思想警察全廃。二、天皇に関する自由討議ふくむ抑圧法規の全面廃止。三、治安維持法など弾圧法令によって拘禁されている全政治犯の釈放』」

音楽。

志賀「俺に見せろ」

長「こつちだ。そのGHQペーパー押ませてくれ」

それぞれ宮本に詰め寄り、編集局騒然となる。

宮本「待ってくれ、まずは記事にしてからだ。済んだら張り出しておくよ」

宮本席に着きその周りを大勢が囲む。

志賀「今夜は乾杯だ。酒の手に入るやつ、いないかね。いいねいいね。天皇に関する自由討議

！」

山主（突然、中道に向かつて）「政治犯の即時釈放！」

増山「（中道に向かつて）思想警察全廃！」

片山（中道に向かつて）「特高警察の罷免！」

志賀「やっと新しい日本の到来ですよ。中道さん、三村さん、今夜、盛大にやりましょうや」

三浦「志賀君。君にも言っておく。経済部の原稿に君が手を入れているそうじゃないか」

志賀「何の話です。あなたがたが私を経済部から追放しても、書くものはたくさんいますよ。」

三浦「とにかくこの際言っておく。正力社長の嚴重警告を受けた。軍閥、官僚および財閥の癒着とか戦争責任とかその種の主題は社説において一切扱わないことになっている。高橋主筆も、一切まかりならぬ、それは現状破壊だ、と・・・」

中道の前の電話が鳴り、中道とびつく。机上の湯飲みひっくり返し、床に。

中道「なに、うん、そうか・・・」（受話器をゆっくり置く）

編集局の一角から記者の声「局長、内閣、東久邇宮内閣、総辞職だそうです」

一同「エエツ」

中道「わかっておる。おい、・・・誰か（机上を指さす）」

誰も知らんふりである。少年社員、雑巾と塵取りもってくる。

志賀（志賀が雑巾と塵取りを引き取り机上へ置く）「自分のことは自分で。これ民主主義」

中道「みんな、仕事だ、仕事。散れ散れ。締切まで時間ないぞ」

中道、雑巾を机にたたきつけて去ろうとする。が、床に転がった湯飲みを踏んで転びそうになり、空いている記者の椅子につまづいたり倒したりしながら出ていく。整理部長後を追う。残った者たちの間に笑いが溶け出す。

何やら蹴飛ばしたようすで、また大きな音がする。たちまち哄笑となる。

マリオン、舞台を駆け抜ける

マリ「おとうさま、電報よ。東京から電報」（音楽）（溶暗）

ワツと起こる歓声で開幕。歓喜の拍手と歓声続く。

スクリーン…ニュース映画…政治犯の出獄。

ナレーション「十月十日、全国の刑務所から、三千人の政治犯が釈放されました。出獄戦士歓迎人民大会は同日午後二時、芝区田村町飛行会館五階講堂で行なわれ、聴衆三千人が押しかけました。会場には赤旗がたちへ一切の戦争犯罪人を処罰せよへ人民共和政府樹立などのビラが貼られ、集会后、街頭にでてデモ行進し、夕刻、連合国総司令部の前で万歳を三唱して解散しました」

スクリーン…朝日、毎日、読売など、釈放と集会の写真・記事。

第四景 読売新聞有楽町別館五階大講堂及び四階社長室

カレンダー『十月二十日（土曜日）』

客席に向かつて正力、演説する。

正力松太郎「部次長以上管理職の諸君、緊急に集まってもらったのは他でもない。四日ほど前のことであつた。鈴木東民元論説委員が俺のところに来た。もう一度働かせてくれと。諸君も御存じのごとく同論説委員は、ナチス嫌いだった。ドイツ滞在当時、政権党ナチスをことごとくに批判、ベルリンで結婚したドイツ人の夫人は、ナチスに全財産を没収された。一〇年ばかり前、ドイツにおれなくなつて帰つて来たところを、当時外報部長だった高橋主筆が拾つてやった。すぐに役職も与え論説委員にもしてやった。しかし相も変わらずヒットラー批判を雑誌に出したりしていたから、軍部とドイツ大使に、俺は再三呼び出されてクビを切れといわれてきた。軍であろうと大使であろうと俺にとっては何者でもない。かばつて来た。ところが、何かの事件とかかわつて病氣療養を口実にどこかへ逃げていると聞いていた。今頃になつてのこのこ出て来て復職したいというから、どなりつけてやった。しかし、言いつ分を聞いてみると、主筆や編集局長が書かせた社説がきっかけだったといい、主筆のたつての希望もあつて復職を認めた。俺は筋は通す。俺の信念だ。俺が物事の理非曲直にどれだけかたくなにこだわつて来たか、諸君の良く認めているところである。復職が筋だと判断したからだ。・・きのうになつて、また鈴木論説委員がやつて来た」

四階社長室。鈴木東民、坂野、長、片岡ら居並ぶ。（東民はこのシーン以後常に三つ揃えのスーツ）

東民「（穏やかな口調で読み上げる）・・七十年の歴史を持つ読売は、国民をだました責任を反省して民主主義の時代を迎える時。ここに発起人一同、社長の善処を望むものである。十

月一九日、発起人代表鈴木東民、以下論説委員、編集局各部長、及び部次長四二名・・」

正力（声）「・・それがどうした」

東民「はあ・・つまりこういうことです」（穏やかだが眼光鋭い）

もとの演説に戻る。

正力「民主主義研究会なる団体を社として公認してくれという。何をやるのかと聞いたら、民主主義の研究並びに実践・若い記者の中には、民主主義とはどういうことか、講義を下さい、と真顔で言つて来る馬鹿がおるのだそうだ。そこで私は答えた。そういう意味の研究なら、社に調査部がある。調査部にやらせる。時代に対応して、というのなら社としてやる。それが筋だ。よけいなことはやるな。・・読売新聞は、正力個人のものである。これを廃刊するも解散するも自分の意のままである。民主主義研究会の設立は社内を動揺させようとする卑劣な戦術にほかならぬ。・・勝手なことはさせない！」

音楽。

第五景 丸の内・レストラン「ときわや」の一室

カレンダー『十月二二日』

あかあかと灯のともる中華料理店。部下を四、五名引き連れた高級官僚らしき人物、店内を過ぎてゆく。

衝立で囲まれた部屋。坂野、志賀、金近、片山、武藤、増山それに鈴木、円卓囲んでいる。

坂野「で、開会司会は、若い人がいいか。定期採用一期生が二人いるが、増山、どうだ（と増山に向く）」

増山「武藤がいいのではないですか。思想的に未熟な男ですから、今後の成長を期待して」

武藤「未熟。子どもみたいに言うな。ま、俺にはお前みたいに特高警察に捕まった勲章はないけど」

坂野「武藤君、やってみるか。何ごとも経験だ」

武藤「やれるでしょうか」

坂野「君、俺のデスクへやって来て、組合のこと何でも勉強させてくださいって言わなかったか」

武藤「ええ、まあ。坂野経済部長のお言いつけとあれば。でも、いいんですか（満更でもない）」

坂野「では決まり。（鈴木、志賀らに）ところで明日だけは、戦争責任、見送って下さいね。私約束してしまっただんです。議題は従業員組合のことにかぎると。でない、講堂、貸してもらえませんでしたよ」

志賀「組合結成は認めさせたのだから、いいでしょう。マッカーサーが組合作りを奨励しているのを、正力さんも知っていた」

鈴木「・・・しかし、いずれ激突する。さて、どうするかだ。労働者の伝家の宝刀、ストライキがやれない」

片山「操業停止まかりならぬ。新聞とめたら占領政策違反。新聞社取りつぶす。総司令部新聞課の公式見解です。さっきインボorden少佐に確かめてきました。新聞・放送は、占領政策を国民に伝達する宣伝手段なんだそうですよ」

武藤「だったら今みたいな紙面がずっと続くってことですか」

坂野「せめて編集第一主義の新聞・・・まじめな読者が納得、支持してくれる」

金近「ちよっとおれに一言いわせる。・・・毎日の新聞は、編集のわれわれと、印刷工場とで刷り上がっている。日々何の問題もなく。その間に変なやつらがいて、あれはいかん、これはこうしろと余計な口出しする。だからおかしくなる。実は、そいつらこそ、我々が追及している戦争責任者にほかならない・・・」

鈴木「金近さんがおっしゃるとおりです。彼らは戦争中国民を誤導したと同じことを、一億総

懺悔などと性懲りもなく繰り返している。紙面を使つての戦争責任の隠蔽だ」  
金近「あいつらに口だしさせなければいい……」

坂野「しかしどうやって……」

志賀「……え、何ですって！」

一同、腰を浮かせて金近のつぶやきを聞き取ろうとする。

宮本、駆け込んで来る。衝立の陰から中をうかがつて

宮本「政治部宮本です。皆さん、嬉しいニュースです！」

## 第六景 読売新聞有楽町別館五階大講堂

カレンダー『十月二三日（火曜日）』

音響…会場いっぱいの人々の気配。開会前の私語も盛ん。高揚した熱気伝わってくる。

舞台正面に、以下の文字が墨書された紙、下がっている。

「一、読売従業員組合の結成と承認」

「一、社内機構の徹底的民主化」

「一、従業員の人格尊重と待遇改善」

「一、自主的共済組合消費組合の結成」

中央に「議長席」下手に「発言者」の演台。旧式の大きなマイク台上に。

武藤（議長席のマイクで）「敗戦から二か月余、民主主義の波ほうはいと起こり、かの正力社長も、組合結成を議題にする本社員大会の開催を認めました。すでに受付で数えまじたる出席者の数、やがて一千人に及ぼうとしております」

口笛。大きな拍手起こる。

渡辺「（会場〓客席から）緊急動議…司会者、武藤君、緊急動議」

武藤「あの一、今議長を決めますので。その後で」

渡辺「（舞台に駆け上がってくる）議題に書いてなんだよ。ここに、四本並んでいるが、社長初め幹部の戦争責任追及がないのは不十分である」

武藤「それはそうですが、それは組合結成を決めた暁に……」

渡辺「（マイクに向かって文書を読み上げる）緊急動議、議題追加。我々は、社内における戦争責任を明らかにするため、読売新聞社員大会の名において社長、副社長以下重役ならびに全局長の即時退陣を要求する。右決議、提案する……」

会場〓客席から「え、社長の退陣」「そんなことしていいのか……」。戸惑いと驚き、そして「賛成」「動議取り上げろ」そうだそうだの拍手、など、うず巻く

武藤「（マイクに向かい）静粛にお願いします。早速、議長を選び……」

鈴木「（会場で挙手して）動議賛成。編集局鈴木です。動議成立」

坂野（鈴木の前について）「鈴木さん……」

鈴木「いずれはこの日が来る。せつかく渡辺君が動議を出してくれたんだ」

武藤（汗を拭き）「・・・打ち合わせどおり行かせてください。今日の議長に鈴木東民論説委員を推薦したい・・・」（拍手かぶる）

鈴木（さっそうと議長席に立つ）「議長仰せつかった鈴木です。まず皆さんにすばらしいニュースをご披露します。朝日新聞社は昨夜の役員会で、社長以下全役員の総退陣を決めました。（会場にどよめき走る）残念ながらわが読売はそんな展開にならない。腹くくって議論するほかありません」

綿引（客席から）発言。発言。開会前に、は、つ、げーん。（鈴木に指名されて舞台に駆け上がってくる）文選の綿引です。戦争責任の追及、私も賛成です。しかし同時に、ここにある議題も大事にしてもらいたい。必ず組合結成を成功させたい。今日は、工場からも多くの労働者が参加しました（大きな拍手）。この日の来るのをみんな待っていた。十年、いや二十年・・・。（叫ぶ）賃金が安い！（「ヤスーイ」の野次と爆笑）暴力団まがいの工務局長や部長に苦しめられた！・・応召して人が減っているのに人を増やさない！工場に支給されていた補給金を、玉砕する将兵のことを考え、どんな苦難も忍べ、と取りあげた！抵抗を組織すると口約束だけはする。しかし守らない！・・・これが読売だ。戦争責任追及賛成。だが、そこにある議題、すべてを大切にしたい。そして、立派な労働組合に成長させたい。従業員の人格尊重！（「人格だぞ！」と野次）待遇改善！」

「給料は倍に」「いや三倍だ」「正力打倒」怒号と大きな拍手。明るい笑い声もして（溶暗）やがて溶明。同じ場面。

鈴木「反対意見、伺いました。同じ社の記者が、戦争中に特別の反対表明もせず、今になって社長の退陣を迫る資格があるのか、という己への戒めを含めた主旨であったかとおもいます。採決ご異議なければ・・・では採決。『正力松太郎社長初め全重役全局長の戦争責任による退陣を求める決議』、賛成の方」

静寂。そして怒号・雄叫びと拍手と。

音楽。溶暗。

#### 第七景 読売新聞有楽町別館四階社長室

テーブルをはさんで正力、小林、中道と、鈴木、長、志賀、坂野、山主ら向かい合っている。鈴木「（文書を読み上げる）あなたは、警視庁在官一三年の間、警務部部长などその幹部として、米騒動の鎮圧、東京市電争議、普通選挙運動の弾圧、共産党検挙などなどの指揮をとった。あなた自ら手柄ばなしとして語り、自ら認めているところである。あなたの罪状の第一は、民主主義に敵対した！」

坂野（後を続ける）「あなたは、一九二四年虎ノ門事件の責任を取って警視庁を辞任。後藤新平氏の支援を得て読売新聞社を買収、七代目社長となる。ナチズムを崇拜し、軍部が政治の世界に台頭するや、新聞社社長の地位を利用して軍部と接触を深め、大政翼賛会、翼賛政治会、大日本政治会の各総務に就任、東條内閣当時は商工大臣岸信介氏の肝いりで貴族院議員になり、次の小磯内閣では言論界を代表して内閣顧問となるなど戦争遂行に積極的な役割を果たした」

鈴木（正力を見据えて）「要するにあなたは、戦争責任者そのものです。新しい時代の新聞社社長にふさわしくない」

正力「この会社の株は、わしのもの。私物だ。社長にふさわしいかどうか、誰にも指図はされない。持たざるものはほざくがいい」

長「（読む）あなたは、新聞を戦争に協力させることによって己の地位を獲得したばかりか、戦争を新聞部数拡張の絶好の機会と捕らえ、読売魂と称して記者を最も危険な弾丸飛び交う最前線にでることを奨励。戦争をあおる記事を書かせ、そのためこの八年間に四五名の記者を犠牲にした。

スクリーン…紙面フラッシュ。赫々の大戦果など写真入りの大本営発表記事や特集記事「神雷従軍記」「本土決戦論」など

・・・と同時に常に、軍部の拡声器となり、ポツダム宣言をあざ笑い、本土での一億玉砕を社説で呼びかけるなど、まさに新聞を戦争遂行の道具にしてしまった。あなたは、新聞が日本国民に対して負わねばならぬ戦争責任の、首謀者、主犯である」

鈴木「（けろつとして）朝日新聞は、あなたのような天晴れな経歴の人はいませんが、それでも皆さん退任されましたよ」

正力「朝日は朝日だ。あんな弱腰で、自由主義日本は真つ暗だ」

鈴木「ちなみに私は変わっておりません、戦前も戦中も今も。常に一介の民主主義者です。変わったのはあなたのような方の時代が終わったということですよ」

正力「それはどうかな。時代は、そんなに簡単に変わるものではない。良く覚えておけ。戦争責任が万が一俺にあるというのなら、記事を書いたのはお前たちだ。まずお前たち編集幹部が身を引いて、その後、おれに説教するがいい」

鈴木「くり返します。私は何も変わっていません。私のようなものが言い続けてきたあたり前のことが、当たり前でとおる民主主義の時代が来ただけです。あなたは、お引き取り頂きたい」

正力「（ものすごい形相で）消えろ！ とつとつ消え失せろ！」

## 第八景 読売新聞別館三階編集局

カレンダー『十月二四日（水曜日）』

鈴木にスポット当たる。

鈴木「社員大会により選ばれた我々実行委員は、昨日の要求提出に引き続き、回答期限の今日



正午、社長と会談、次の回答・・・これが回答か！　どう呼べばよいのだ！　かような非礼極まる文章を手渡された・・・」

舞台が明るくなると、中道がデスクに落ち着かない様子で座り、その回りには長、坂野、山主、志賀らが紅潮した面持ちで並んでいる。みな東民を見上げている。

東民は、中道のデスクの上に土足のまま仁王立ちに立っている。

鈴木「読み上げる。一つ、戦争責任は諸君から云々されるべきものではない。従って決議の趣旨により退職する意志はまったくくない」

上階の正力にスポット当たる。

正力「二つ、しかしながら、自分がかねてからの素志に基づいて本社の戦災復興一段落の暁には進退を考慮するつもりである。三つ、ただし、今回の事件について、社を騒がせたものはその責任をとるべきである。鈴木東民、長文連、菱山辰一の各論説委員、坂野善郎経済部長、山主俊夫整理部次長、以上五名に退社を申し渡す・・・」(消える)

編集局に戻る。鈴木東民、文書握りつぶし、怒りに震えている。

しばらく沈黙・・・「社長横暴！」の怒りの野次で騒然となる。

鈴木「我々は、この処置は極めて不当であると抗議し、こう宣言して引き上げてきた。この瞬間から闘争に入る、と・・・(緊張の中、長い拍手)」

鈴木「これから名を呼ぶものは、戦争責任者として、即刻この場から立ち去ってもらいたい。編集局長中道佳親・・・(異議なし。即刻退場。出ていけ。など怒号、拍手)・・・なお、戦争責任者と行動を共にせんとする方は遠慮はご無用。ご自由に」

声「よお、整理部長よ。あんたいいかい」

三浦「どうして俺が退場せねばならぬ。正当な理由を明らかにしたまえ」

声「自分の胸に聞け」「文句あるならいつてみる」「つまみだせ！」声「あんた、政治部長、鮎川さん、あんたもだ」

鮎川「へん、俺の勝手じゃねえか」

声「勝手にはさせない！」

鈴木「(机の上から見下ろし、中道を睨みつける)あなたですよ。中道さん。あなたの名前を読み上げた。聞こえましたね」

「編集局長出ていけ」「中道、聞こえぬふりするな」など聞こえる。

意を決したように、中道立ち、去る。歓声、拍手。

整理部長や政治部長ほか数人が後を追って去る。

「ごますりどもが」「なんだあのさまは！」罵声と嘲笑と拍手続く。

鈴木「工務局長児島文夫・・・。業務局長八反田角一郎・・・」

ウオー。異議なし。さっさと失せろ。待つてました、せいせいすらあ、など喜びあふれた声上がる。

鈴木「我々は、この社員大会をもって闘争状態に入る。そして、明二十五日付けの新聞から、我々の手で自主的に製作・発行することを宣言する！」

長い、大きな拍手続き、音楽高まる。

(幕)

## 第二幕 われら戦争責任追及す

### 第一景 焼け跡の広場 わずかに復興の街がみえる

カレンダー『十月二十五日(木曜日)』

スクリーン：以下の文字が映し出される「十月二十五日午後三時半 編集局にて開催の社員大会で『読売新聞社従業員組合』結成なる」「組合長鈴木東民」「加入者一一六三名。加入率七二%」(消える)

「りんごの歌」、はじけるように。

舞台明るくなると、敗戦直後の様々な服装の人々が行き交う。

スクリーン：読売報知社説『「新聞」への断罪』

志賀、新聞を手に舞台中央に来る。

志賀「(紙面を読み上げる)戦争責任者を徹底的に掃蕩し、それらが拠った牙城たるその機構制度を徹底的に変革すべきである。これ日本民主化の第一前提である。戦争犯罪者として告発せられざるの故をもって、戦争責任者が恬然<sup>てんぜん</sup>としてその牙城を固守するかぎり日本の民主化は断じて行われぬ」

(片山・山主らが来て並ぶ。以後、三々五々記者たちや菜っ葉服(その他油にまみれた作業着)の工場労働者が加わり以下の論説を唱和する。

片山と群読「この戦争の前後を通じてこの新聞がたとえ弾圧のもとにあつたとはいえ軍閥、財界、官僚等の特権階級の手先となり、戦争への国民の駆り立て、戦争の拡大に果たした罪は限りなく大きい。しかも度を越えて進んで彼らに阿附(あふ)するの醜悪をさえ演じたのである」

スクリーン：戦時中の大本営発表紙面のいろいろ

山主と群読「ことに真実を伝えざるのみならず、事実とまったく反対の報道を臆面もなく報じて国民を欺瞞し、国民の戦争についての認識を誤らせ、その目をくらませた罪に至ってはまさに万死に価する」

(鈴木を囲んで吉田など女性記者や少年社員もくる。鈴木を前に押し出し)

鈴木と群読「全体主義の波を利用して社員の生活を犠牲にし、弾圧に拠って社員の筆を封じ、それに拠って自腹を肥やした新聞財閥の首脳及びその手先を清掃しなければならぬ。それと同時に、旧来の機構、制度を廃止し、社員の下からの全意志を組織化した新しい民主主義機構と制度とをもって、民主化に徹底した紙面を作り上げることが絶対に必要である」(行進曲とともに全員退場)

カレンダー『十月二七日（土曜日）』

スクリーン…同日社説「われらの主張」

同じ場面。長登場

長（読む）「（読む）我らの主張。我々の闘争は単なるストライキではなくむしろ公器としての新聞の生命を発揮せしめんとするものであり、国民と共に進むよりよい新聞を製作発行せんとするものである。我々は社会主義や共産主義を奉ずるものでなく、また資本主義の抹殺を願うものでもない。ただ資本と経営との分離を通じて、資本の影響が新聞編輯の上に及ぶことを避け、従業員代表者の参加による経営の明朗化を企図し、奴隷のごとく待遇せられ来たった全従業員の人格の承認と尊重とを要求するに外ならぬ。労働組合の結成は実にマツカ―サー司令部の要求するところである。しかるに従業員組合結成に努力する本運動首脳は社長によって退社を命ぜられた。我々はあくまで断固として戦う、新聞の完全なる民主主義化のために・・・」

読者（男）一が紙面もって登場し、長に近づく。

スクリーン…紙面コーナー『視野』

読者一「（紙面をかざしながら）闘争する記者へ。貴社では目下民主主義確立のため幹部に対して社員が闘争しているが、結構なことだ。正力社長のごとき奴は早くたたき出してしまいなされ」

読者（男）二が同様に登場

読者二「民主主義獲得のための闘争であるという諸君がその口の下で官尊民卑の思想の現れである役人どもの異動を大々的に第一面を割いて発表するなど笑止である。また無責任な政治屋の発表するでたための政策をどの発表も事前に十分検討し、鵜呑みの発表をしてはならない  
中年の読者（女性）登場。

女性「私、この十月、新内閣による婦人参政権を得たる一女性です。去る二六日の『近衛公とその責任』と題する論説は全国民のうつつんを余すところなく發揮して止まず、私たちをしてむしろ快哉を叫ばしむるものがありました。しかし二七日の紙上には、近衛公の上奏文と題して卑怯なる責任回避の宣伝記事と見られるがごときものを掲載されたのはいかがでありましようや」

長「（紙面を読む）ご期待に副わんことを誓い紙面も近く徹底的に刷新します」  
長、読者たちに手を差し出し握手を交わす。

## 第二景 有楽町別館四階専務室

カレンダー『十月二九日（月曜日）』

五人の客が部屋を一礼して出る。最後に武藤が出ようとする。

小林「やあ武藤君、君たちも忙しそうだな」

武藤「このところ千客万来ですよ。組合作りの相談やら激励やら会社への抗議やら。わざわざカンパや差し入れを持ってきてくれる人もいますから」

小林「武藤君ちよつといいかな」

武藤「僕、行かなきゃ」

小林「この抗議文のことで聞きたいのだ」

武藤、立ち止まって武藤を待っている客人たちに。

武藤「すみません、お先にどうぞ。階段下りられたら二階で文選植字職場のものがお待ちします。まずので。(小林に向きおなり)なんですか小林専務。いまの『民衆の名による社長以下引責辞任要求決議』、何かケチつけようというんですか」

小林「いや、社長に正確に伝えないと。なんという団体だったかな、いまの」

武藤「そこに書いてあるでしょう、読売争議応援民衆大会。焼け跡の広場に一五〇〇人集まったと言っていたでしょう」

小林「あの決議文とかいうのを仰々しく読み上げた、あの爺さんが・・・」

武藤「ご存じないんですか。荒畑寒村と言えば有名な方ですよ」

小林「共産党か」

武藤「違いますよ。近々社会党を結成するそうです」

小林「まあそうつんつんせずそこに座れ。砂糖が手に入ったから紅茶でもどうかね」

武藤「そんな場合ではないでしょう。失礼します」

小林「ま、座れ。・・・ところで、武藤君。君は、入社面接のときに、政治家になりたいのでまづ新聞記者に、と言ったんだったね」

武藤「もうそのことは言わないでくださいよ」

小林「伝説になっているのだから、いいじゃないか」

武藤「お恥ずかしい」

小林「男一匹、壮大な志だ・・・で、着々と準備中なのかい」

武藤「はあ、準備って・・・まだなにも、そんな・・・」

小林「今から点数稼いで、入党して。・・・それとももう、入ってるのかね」

武藤「え！・・・入ってる・・・入党・・・？ ま、まさか。僕は、僕、そんなんじゃあ、ありません・・・。失礼します」(狼狽して去る)

小林「君の未来のことだからな。すこし気にしてみたのだ。ハッハッハ」

### 第三景 有楽町別館読売新聞二階文選職場

大勢の労働者が荒畑ら代表団を囲んでいる。

代表の一人「私、荒畑は平民新聞で仕事をしたこともあり、諸君のいわば仲間の一人です。諸君たちが立ち上がったと聞いて、私は嬉しくてかけつけてきました。来てみてまた喜んだのは、編集の諸君と工場の諸君とがひとつになつてたかっていることです。大正八年の時は、編集はむしろストライキ破りの側に立った。今ここへ来て、日本の知識人の大きな進歩を目の当たりに見る思いです」

綿引ら工場労働者たち「ありがとうございます」「がんばります」と、かけより握手交わす。

#### 第四景 有楽町別館社長応接室

カレンダー『十一月一日（木曜日）』

ひげの人物と正力。

榎橋「正力さん、八日目ですか、今日で。大新聞の争議というのは目立っていません。あなたは、警察力で何とかならぬのかとお思いのようだが、さすがはあなたの社員。私のところつまり内閣法制局と、総司令部労働課に日参してましてね、強権力の発動がないように。今のところ、総司令部は介入しない、させない方針ですな。さらに、この際、調停による解決というものを、日本に教えたいようすで・・・」

正力、文書を読んでいる。

正力の声「フムフム・・・ハッハッハ、なになに・・・ハッハッハ・・・」

榎橋「①正力氏の長男を社長にし、正力氏と、榎橋が相談役になる。

②鈴木東民を重役にする。

③正力氏所有株のうち三割越える分を公開

④読売新聞社を、有限会社から株式会社へ・・・どうです」

正力「長官、あなたとあろう方が、国家的見地から、そのような妥協案はだすべきでない。何よりも、若年で世事にたけない長男を社長にして、どうなるというのです。私が妥協すれば、このご時世、あちこちにロボット社長が輩出することは明らかです。私は、正力個人でことを考えてはおらぬ」

#### 第五景 街の広場(第一景と同じ)

町工場に赤旗がたちスト決行中のビラが見える。音楽明るく。

スクリーン・・・以下の文字「この一〇月から十一月にかけて朝日新聞、共同通信、時事通信、中部日本新聞、日本放送協会などに組合誕生。食糧不足とインフレにより庶民は飢え、労働争議が頻発した」

スクリーン・・・読売新聞社説フラッシュ『近衛公とその責任』「大衆運動への理解」『民主主義啓蒙運動の必要』『戦争責任の究明に徹せよ』音楽続いている。

紙面七段記事『巧みに戦争責任韜晦 正力本社長・第一回交渉の言い分 本社民主化闘争既に旬日余に及ぶ』

#### 第六景 社長応接室

カレンダー『十一月二日（金曜日）』

舞台明るくなると会社側正力と小林専務。闘争委員会は鈴木、志賀、時澤、書記武藤が向かい合っている。正力および鈴木、それぞれに懽然とした表情で。

小林「・・・君たち、事態終結のための正力社長の英断だよ・・・」

鈴木「・・・戦争責任は会長になることですか」

小林「・・・これ以上の提案はないのではないかね。従業員の意見を反映させるため、組合代表を重役会にいれる」

鈴木「だれか、そんな要求しましたか」

小林「要求はない。英断である」

鈴木「まさか、私どもが重役になりたがって争議にいたった。そんな勝手な筋書きを思い描いておられる・・・そんなわけではないですよね」

正力「・・・当然である。鈴木君は重役候補に入っておらん！」

鈴木「大変よくわかりました。では、組合代表重役というなら人選は組合に決定権がある」

小林「そんなバカな！」

鈴木「乗っ取り乗っ取りと大宣伝しながら、もう一方では組合から重役。恩恵でなくれてやってもいい。切り崩し・・・買収じゃないですか！」

小林「会社は、新時代にふさわしい有能な人材を求めているということだ」

武藤のぎよる目が、一瞬輝いた。

志賀「鈴木さん、今日のポイントは、会社の考えを聞くこと。お忘れなく」

鈴木「だから訊ねておる！・・・戦争責任は、会長になること、ですか」

正力「（間）俺は戦争に関して責任がないとは言わない。しかし、責任を感じるならば、責任ある地位にとどまって新聞のために努力を払うべきだと考える」

鈴木「そうおっしゃるだろうと思っていましたよ。昔からよくある回答ですから」

正力「もっと自信を持って、わが陣営、自分の所信を披露せよ、ということだ。東條なども、自殺など企てずに、堂々と法廷に立てばいい」

志賀「へえ、自信を。・・・何がおっしゃりたいのですか」

正力「俺だって軍部と闘ったということだ」

鈴木「それ、私を軍部からかばったと・・・私への恩着せですか・・・」

正力「いやいや。俺は昭和一六年九月の新聞資本大合同に、率先して反対した。彼らは、新聞は全国ひとつでいいと言いだした。軍部と渡り合ったのは、この俺だ」

志賀「自分の利権を守っただけじゃないですか」

正力「君たちは、新聞が大本営発表そのままに、国民を誤導したというが、そうする以外に新聞の発行は続けられなかった。このことは、国民の理解を得られるはずだ。もつともつと主張して、納得してもらおう必要がある」

鈴木「開き直りですか。問題は、紙面以前の問題なのです。あなたは東條内閣の顧問になり、戦争遂行に力を貸した。そのあなたを、全重役、全局長が補佐したんです。あなたと、幹部が、新聞社に居座っていることが問題なのです」

時澤（情に訴える口調で）「社長、今は大きな変動の時です。このことを理解してくれませんか。こんなこと情において忍びませんが、読売をかわいとおもうなら（涙ながら）この際引退してしばらく辛抱して下さい。そのうち必ず復活の時が来ますから」

書記・武藤「占領軍に指名される前にお辞めになるのが身のためと・・・」

鈴木「武藤君、この場に占領軍は関係ない」

武藤「占領軍が大物と言われる人物を一人ひとり洗っている。そう嬉しそうにおっしやっただのは鈴木さん、あなたですよ」

鈴木「我々の民主主義は、我々の自力によってのみ達成される。我々は、アメリカの手は借りません！」

武藤「もう借りてるんじゃないんですか」

鈴木「借りてはならないのだ！ 君は記録係だ。口出しするんじゃない！」

### 第七景 有楽町別館五階大講堂

カレンダー『十一月五日（月曜日） 第五回社員大会』

舞台は執行部が数名席に。大勢のざわめき。客席から野次。

野次「なにやってんだ」「はやくしろ」「おれたちいそがしいんだ」

松尾「（松尾、飯間二人の若い文選工やってきてタイムレコーダーを演壇に運び上げる）文選工松尾正吉です」

飯間「同じく文選工飯間浩二です」

松尾「（演説口調に替わり）これは正力社長が設置したタイムレコーダーである。正力社長は、八時に出勤、『俺はよその社長の五倍働く。諸君も他社の倍働け』と九時出勤を強要し、市内版の作業の終わる夜一時一二時までの一五時間勤務を強制した。われわれは、今日、このタイムレコーダーを封印する」

（飯間が紙を貼りつける。「いいぞいいぞ」「賛成」笑いと拍手）

飯間「自分たちの新聞を作るのにサボったり仕事をいいかげんにできるわけがありません。出勤退勤時間は、みんなの話し合いで決めることにします。我らの自発的労働により我らのよりよい新聞作りを行うこと、誓います！」（会場の雰囲気ますます盛り上がりつついく）

竹内（発言者席に駆け寄って）「緊急動議。社会部竹内。ええと・・・我々の闘争を更に熾烈にするために、提案する。しっかりきいてくれ。この際、全社員、部長とか次長とか参事・副参事とか、会社における役職・身分を返上することにしてはどうか・・・」

多少の戸惑いと笑いの拍手起こる。「俺はいいけどよ」「お前ヒラだからな」

小山（執行部席から立って）「われわれ最高執行委員会、及び常任委員会においてもそのことはかねてから話題になっておる。戦争責任者によって任命された不合理な人事だから返上、という点を明らかにしたい」

志賀（執行部席から立つ）「大切なのは、日常の現場、末端の部または課です。ここの組織ががちり固め、各部独自の条件に応じて真剣に闘うことです。部課ごとに闘争委員会を作つて、青年社員も上からの指図を待つのでなく大いに力を発揮して貰うというのはどうでしょう」

竹内（再び登場）「そこでだ、文章拙いけどよ、決議文とかいうの書いてみた。即興で書きな

ぐったから適当に変えてくれ『決議、社長以下全重役全局長の戦争責任を追及闘争中のわれらはこの際丸裸となってこの闘争を強力に推進すべく彼らより与えられたる一切の地位、身分、職名を返還することをここに決議す』以上」

客席から「では何と呼ぶんだ」「小隊長殿！大隊長殿！」「バカかお前は」。

「決議賛成」「賛成」「面白れえー」「議長採決」明るい笑い声と拍手盛り上がる。

暗く狭いコーナー。

小林専務と武藤最高執行委員に照明当たっている。

社員大会の笑い声と拍手聞こえている。

武藤「こんなところに呼び出さないでくださいよ」

小林「大会盛り上がっておるから今は安全だ」

武藤「僕を長さんの二の舞にしないで下さいよ。長さんは檜橋長官に一人で会いに行つたというので書記長クビになったんですから」

小林「君を見込んで意見聞きたいんだ。そこへ掛けて、読んでみてくれないか。これは、社長を口説いてまとめたぎりぎりの小林最終案だ。もちろん君個人の意見で結構だ」

武藤「個人の意見言つてどうするんです。（しぶしぶながら小林から紙切れ受け取る）『正力社長は相談役とすること』。へえ、相談役・まあねえ」

小林「新社長は新聞連盟理事長務台光雄、そこは変わらない」

武藤「『正力社長は新社長と相談して局長以上の人事を決定する』。・・・何ですかこれは。主筆、編集局長の辞任はうたわらないんですか」

小林「形だけが、社長は辞める。君たちの要求が通っておる」

武藤「だったら正力さんが人事権持つなんて書かないでくださいよ」

小林「正力さんは、その付帯条件で納得した。おい武藤君、聞いているのか。」

武藤（メモ紙を裏返すなど確認して）「・・・解雇問題はどうなんです」

小林「それは今までどおりだ」（武藤、失望の色をかくせない）

武藤「だったら何も変わってない。組合としては受け取れませぬね」

小林「だから君を呼び出したんじゃないか。君を見込んで、だ」

小林、あたりを確かめて身軽に立ち去る。

武藤「専務、待つて下さい。あの・・・君を見込んで・・・」（困惑と野心・・・表情は複雑である）

社員大会会場。拍手盛り上がっている。

田中「編集現場から一言申し上げたい。私は外報部長田中幸利だが、まあ、どう呼ばれようとかまわない。今は毎日の新聞発行の編集委員会委員長を仰せつかつておる。よりよい新聞を作ることに、これが我々の闘争それ自身であり、我々の目標の一つである。わが自主讀賣は読者の支持を得て大いに部数を伸ばしつつある。（歓声と大拍手）しかしいかに良い新聞を作



ってもそれが二百万読者の手に配達されなければ何の価値もない。したがって、編集も工場も締切り時間を絶対厳守してもらいたい。闘争以前の読売以上にスムーズにこの紙面を読者の手に渡そう。それが我々の戦いの一つであり勝利への絶対条件である」(大きな拍手おこり……)

## 第八景 社長室

小林専務応接ソファにぼつねんと腰かけている。社員大会は続いている気配。

正力松太郎、晴れ晴れとした顔で入ってくる。

正力「小林君、先程は気の迷いだった。俺の信頼する重役一同に、頼む、と頭を下げられるとなあ。正力も情にはもろいということだ、ハッハ」

小林「正力さん……」

正力「私の指南役、藤原銀次郎先生がご在宅で、お会いしてきた。俺は間違っではないと思うだ。……改めていっておく。俺は社長をやめない。どんな大物が斡旋に来ても同じだ。たとえ形だけとはいえ、俺が社長をやめると、波及する。労働者の圧力で、やめたとあつては、日本の資本家陣営が混乱に陥る」

小林「正力さん。……そうですか。……心得ました」

五階の拍手聞こえている。

音楽。明るく。……次のシーンにつながる

## 第九景 日比谷音楽堂

カレンダー『十一月十日(土曜日)』

音響…歓声、人のざわめき。秋空に屋外集会の演説がこだまする。

横断幕に『読売闘争応援大会 主催…全国新聞通信従業員組合同盟。日比谷公園音楽堂』とある。

壇上(舞台)に、次のプラカードを持ったさまざまな服装の人が居並ぶ。「漁民組合」、「組合同盟中央準備会」、「人民文化連盟」、「新日本婦人同盟」、「社会党」、「共産党」、「日本学生聯盟準備会」、「民主主義準備会」、「朝鮮民衆新聞」朝日新聞従業員組合、「東京新聞従業員組合」放送協会職員組合」など。

聴濤(反響するマイクの声)「朝日新聞従業員組合の聴濤です。私は今日、ご参加の二〇〇〇人の皆さんの前でこう名乗れる喜びをかみしめています。本日午前、私たちは、組合を結成し、読売の仲間と共にあります」

歓声と拍手。客席の遠くからよく通る声の野次「実力闘争で読売を助けろ」。この野次で、

また大きな歓声、拍手。

聴濤「先日私たちは、読売の闘いに励まされ、働く国民の皆さんと共に歩む新聞作りを紙面で宣言しました。この新聞の民主主義化の前に立ちはだかっているのが正力松太郎氏率いる読

売経営陣です。読売闘争の勝利なくして、私たち新聞労働者の、そして新しい日本の民主主義の勝利はありません。私たちは、不退転の決意で読売労働者と共に戦います」(拍手と歓声)

袴田(マイクの前で)「日本共産党の袴田里見です。みなさんは、結成以来二三年の私ども共産党、それを公然と名のる人物を初めて目にされるのではないでしょう。それほどまでに権力者は我々の活動を恐れ牢獄に押し込め続けたのです。今日最大の問題は、何か。それはただ一つ。長年にわたり民主主義を暴力で踏みにじってきた、天皇絶対主義勢力が、その責任をまったく自覚していないことです。自覚しないどころか、一億総懺悔と称して責任を国民に押しつけ、国体の護持と称して自らの延命をはかっています。新日本の出発はまず、戦争責任者の追放から始められなければなりません。その闘いの火の手を、読売の、そして新聞労働者が真っ先に上げられたのであります・・・」(大歓声、拍手)

音楽。プラカードもった人々の行進がシュプレヒコールを唱和しながら舞台を回る。「正力追い出せ!」「読売労働者万歳!」「読売労働者に続け!」「正力の罪状は東条に匹敵する!」「もし正力勝てば読売新聞不買同盟で応えるぞ!」唄に乗った陽気だが気迫ある唱和がこだまする。

#### 第十景 読売新聞有楽町別館

唱和が続いたまま、舞台は読売新聞有楽町別館に代わる。

玄関すぐ上にバルコニー。バルコニーに、鈴木東民、聴濤克巳、荒畑寒村、袴田里見、その他女性・学生を含む団体代表が並んでデモ隊に手を振っている。

デモ隊、社屋を囲んだ形となりシュプレヒコールさらに力づく。

上階の社長室の片隅にスポット当たる。

下駄箱に頭を突っ込んで震えている男がいる。

小林通りがかって立ち止まり、突き出たお尻を軽くたたく。

正力「(おびえ切った声で)だ、誰だ、名乗れ」

小林(相手を見て驚く)「正力さん。社長・・・」

正力「き、君か」

小林「どうなさいました。ご気分でも悪いとか」

正力「どうして早く知らせぬ。共産党が来ておるといふではないか。俺を早く避難させる」

小林「落ち着いて下さい。大丈夫です」

正力「何を言うか。共産党が俺をどれだけ憎んでおるか、警視庁と一緒に仕事をしたお前には、わかるだろう」

小林「・・・わかりました。安全に避難できるよう、手配します」

正力「はやくするんだ。やつらの十八番は人民裁判だ。処刑されてたまるか」

(屋外の唱和一段と高くなり、正力、身の置き場求めて落ち着かない)

第一一景 同編集局

武藤他数名の記者が自分の席で原稿を書き、電話などかけている。デモ隊の唱和聞こえている。使いの少年、和田記者に書類渡す。

和田「ご苦労さん。なに、小山さんから・・社会部和田記者殿。え、俺宛て。在中の二通の手紙、扱いを畏友和田記者に託す。何かただ事じゃないな」

紙包を開くと、手紙である。一通、床に落ち、拾う。

和田「辞表！最高闘争委員長 鈴木東民殿、小山義夫。おうい、誰か・・ああ、武藤君。君最高闘争委員だったね。・・小山最高闘争委員の辞表だぞ」

武藤「・・辞表？・・。穏やかじゃないですね」

和田「君、心当たりあるのか。落ち着いていないか」

武藤「いや、この二日ばかり、最高闘争委員会で激論中でした・・」

和田「もう一通は・・『社を愛する人々に訴える』（手紙ひろげて読む）『私は今、正力社長に辞表を提出してきた』・・どういふことだこれは」

武藤「え、会社も辞めるんですか。そこまでしなくても・・」

小山の声「私は小林専務から小林最終案の内示を受け、読売の異常事態を一刻も早く修復しなければといわれた。立場は違うが、私も同じおみである。（和田のまわりに人が寄つて来る）最高闘争委員会は、今、第三者による調停機関にゆだねようとの方針に傾いている。しかし、その一員である私は、社長との直接交渉をあきらめず、読売内部での妥協点を見いだすべきであると主張してきた。もし第三者の調停になり、調停委員に社会党や共産党など社外勢力の導入を許せば、彼らに政治的に利用される・・」

記者竹内「和田さん、我々にも読ませてください」

記者和久「小山さんは、俺たち社会部の大先輩だ。大きな声で読んでくれ」

和田「（読む）社は戦災を被つて復旧途上にある。この時いたずらに闘争を長引かせることは社を滅ぼす・・」

社屋を囲むデモ隊は、一層元気よく高々と唱和する。

「反動新聞撲滅！」 「新聞財閥正力追放！」 「読売労働者に続け！」

第一二景 三階会議室

カレンダー『十一月二日（月曜日）緊急常任闘争委員会』

舞台に向かって最高闘争委員（鈴木、志賀、武藤、小田、金近 時枝、山主）。それに向き合う形で常任闘争委員が着席している。

小河内が起つて力を込めて手紙を読みあげている。

小河内（手紙を読む）「私にはこれらの最高闘争委員たちが闘争のための闘争をしているとは思えない。社長退社の小林専務最終案が出されたいま、話し合いのテーブルについて、よりよい解決のためにこそ汗を流す時ではないだろうか。社内の紛争はあくまで社内です。それ

が団結を維持する最善の方法であると信じる。去るに当たって敢えて社を愛する人々に訴える。小山義夫」

(歓声と勝ち誇った拍手起こる)

和田「社会部は、部として決議した。(すかさず吉田玉緒が着席のまま「私は反対しておりませぬ」。和田は無視してつづける) 小山支持、第三者調停反対、直接交渉による早期争議妥結、以上の三つです。そのための、最高闘争委員会の改組、この際言いにくいことを言わせてもらえば、鈴木さん山主さん二人の解雇該当者を含んだ最高闘争委員会では、冷静な議論にはならないのではないかと思う」

(拍手。同時に「反対」の声)

奥井「反対。反対意見。印刷部闘争委員、鉛版工奥井です。戦闘部隊が戦闘中に司令官を罷免して、敵はどうおもうでしょう。敗北宣言と一緒だ。(激昂して) あんたがた、何を考えているんだ！」

古川「文選、古川。その手紙とやらなるほど文章はうまい。もっともらしく書いてある。だが、それがどうだというんだ！ 小林最終案とやら、俺たちの要求が何か通ったかね。生活が少しでも良くなるというのか！ 俺たち、日本の進路を決める民主主義革命の争議をしているのだ。俺たち工場の労働者は、こんなお涙頂だい式の文章に一人だつてごまかされはしない。ごまかして動揺しているのは、編集のお坊ちゃん共だ」

(「そうだそうだ」「そのとうりだ」の声。と同時に、「お坊ちゃんとは何だ」と古川にとびかかる者あり、「なに、やっつけてしまえ」と工場労働者が総立ちになる。それを止めに入る者、襲いかかるうとする者・・・)

武藤(叫ぶ。今日の議長をつとめている)「静かにしてください。静かに・・・」  
女性谷口「あのう、いいですか。資料部庶務の谷口ですけど、私にはよく分からないのです・・・うまく言えませんが・・・(「だったら引つ込んでろ」「黙って聞け!」「ミツちゃんがんばれ」。印刷工場労働者の一団から「思い切つて前へ出て大きな声でしゃべれ」・・・拍手おこり、拍手に押されて前に出る)

すみません、こんなところ初めてで・・・あのう、退職するなら、黙つてやめて欲しい、と思えます。社内社内というなら、社内に残つて議論しなくては。辞めて、こんな形を期待してらんだつたら外からかき回しているのと同じ。だって、手紙とは議論できません・・・すみません、何を言おうとしたのか・・・、おわり」(立ち往生して席に戻ろうとする。吉田玉緒、拍手して励ます)

鈴木「(武藤に)議長、発言いいかね。谷口君といったね、良かったよ。よくわかったよ。議論はお互いしっかり向き合つてやろうじゃないか、ということだろう。そうなんだ。民主主義の第一歩がそこから始まるんだ」

谷口「ありがとうございます。失礼しました」(一礼して、席に駆け戻る。笑いと拍手起こり、緊張ほぐれる。溶暗)

第一三景 読売新聞役員応接室。

カレンダー『十一月一日（水曜日）』

右翼風の男に小林が応対している。

小林専務「この頃あなた方のような客人が多くて。今日は三人目です」

男「ということはまだどなたにもお任せでない。間に合ってよかった」

小林「問題はアメリカ軍でしてね。組合の側に付いてますから」

男「アメリカこそ私有財産の国ではありませんか。正力社主の財産が多数の暴徒によって占拠

されているのです。それを排除したからといって、文句は付けられないでしょう。アメリカの経

営者は、こんな場合容赦しないと聞いておりますぞ」

小林「そのところの見極めが付かない・・・」

男「ということは、打つ手なし・・・。正力さんとあろう方が、迷っておられる・・・。正力さ

んもついにただのご老人におなりになった。あの読売が、戦争責任追及だ民主革命だと、共

産主義の新聞になりさがっておるのを、打つ手なし・・・ハッハッハ。これは笑止千万。決着、

私どもがつけて差し上げますよ」

小林「どうぞおひきとりを。ここところは、上手にやりませんと」

第一四景 編集局

カレンダー『十一月一日（木曜日）』

罵声と共に編集局。かつて中道が使っていた編集局長のデスク前で、記者たちと、五人ほど

の総務局の男たち及び三浦整理部長とが対峙している。

総務局の男「貴様ら、業務妨害だぞ。新しい編集局長が、仕事につくんだ」

増山「聞いてないよそんなこと。聞いてても認めないけど」

総務局の男「辞令が出るんだよ。見てきたらいいだろう。さあどいたどいた」

男たち、三浦を両サイドと後ろから固めて、椅子に座らせようとする。

宮本「何が辞令だ。こんなことして何になるんだ」

「どけどけ、じゃまするな、業務妨害だ」「腕組め、手を使うな」、などの声とびかい、も

み合いとなる。一瞬、マグネシウム焚かれる。

「なんだなんだ、どうした」声と共に、作業服の十人ほどの文選職場の労働者駆け込んで来

て、もみ合いに割ってはいる。

宮本「三浦さん、あなたもあなたですね。恥ずかしくないですか」

三浦「芝居には必要でね、憎まれ役つてのが。すすんでやる馬鹿は居ないが」

総務局の男「局長、引き上げますか、今日のところは。写真も撮れたことだし」

「二度と来るなよ」「無駄な抵抗やめろ」罵声浴びて引き上げていく。

激突をあらわす音響

スクリーン…画面いっぱいには東京地方検察局の鈴木東民あて呼び出し状。

「一月一五日付呼び出し状に文字が被る「業務執行妨害、不法占拠、家宅侵入。正力松太郎の告発による」

## 第一五景 会議室

カレンダー『一月一七日（土曜日）』

（溶明）第一四景と同じ場面、同じ人物配置。だが、疲労のせい、平静な議論の場になつて

いる。  
宮本「利用されるぞ、利用されるな、というのは、企業に閉じ込める会社側の論理ではないでしょう。我々の闘争は、一見社内での闘争に見えます。しかし、戦争責任追及という国民的大命題・幾千万の読者、国民、と共通の要求で闘っているのです。協力したいという外部勢力の力を我々がどう借りるか。もつと言え、利用させてもらうか・・・」

印刷綿引「直接交渉で我々が得るものは何か。あいかわらず実権を握っておる正力が、新社長に据えようとしている務台ともども我々に襲いかかる、それだけじゃないか。しかも、鈴木東民さんほか最も信頼すべき我々の指導者を失う。得るものがあるどころか、損失しかない。我々を応援してくれている幾千幾万の仲間、どう説明がつくというのだろうか。今ここでいいかげんな妥協をすれば、ようやく立ち上がり始めた全国の労働者に水をかけることになる。最高闘争委員会の方針どおり、直接交渉を打ち切り、調停機関への持ち込みを、早期解決への戦術として用いるほかない」

綿引の演説の間に、拍手や賛同の合の手ますます大きく勢いを得て来る。

「議長採決」「採決異議なし」と「採決」の声高まってくる。

武藤（議長）「和田さん、どうしましょう。毎日毎日五日間も議論したんだし議長としては多数決にしたくない。賛成も反対もみな身内同士なもの」

和田「うん（形勢不利に納得して）無理だな。では発言（席を立つ）。我々社会部は、小山氏の退職に驚いて氏の心情に動かされていた。小山支持および最高委員会についての提案、撤回します」

「よしそれでよし」「前へ前へだ」など隣同士、肩をたたき合い握手し合う。音楽

## 第一六景 農民デモ

明るい行進曲とともに五台のリアカーに野菜を満載。あとに農民デモが舞台をめぐる。

プラカード『耕作農民は正力社長の退陣を要求する』葛飾区青戸三・四丁目農民」

スクリーン・朝日社説『正力氏の告発を指弾』

聴濤にスポットあたり『正力社長側がいまだに戦争責任の受諾に肯がえんぜず、あまつさえ従業員最高委員を告訴するの暴挙に出たことは、国民の名において指弾されてしかるべきである』・・・

音楽に乗り以下のプラカードが舞台をめぐる「弾圧法令撤廃徹底集会。読売本社へ抗議」「自

由法曹団 読売抗議声明」「日本民主同盟 読売争議支援民衆大会トラック・デモ」

スクリーン…文字「十一月二六日 毎日新聞従業員組合正式発足」「毎日新聞全従業員の間  
接選挙で、役員入れ替え」

#### 第一七景 読売新聞会議室

カレンダー『十一月二六日(月曜日)』

団体代表と、鈴木ら最高闘争委員会の数名とが並んで腰かけている。

代表一「正力さんの告発も当然ながら不起訴に終わって労使とも労働委員会の席に着くことになった。そこで読売さんのお申し出があつて労働者側委員三人の人選について私どもにご相談、こういう主旨でよろしいですね」

鈴木「そのとおりです。組合や団体代表のみなさん、お忙しい方々なのに恐縮です」

代表一「三人のうち、社会党の鈴木茂三郎さんと朝日の聴濤さんについては読売さんの組織内で問題なく決まっています。その三人目を聴濤さんは、共産党さんに加わって頂くほかない、とおっしゃっている。(聴濤に) そうですよ」

聴濤「そうです。共産党を除外した調停委員会では、私は自信がありません」

団体代表一「もし共産党をはずすなら、自分は委員を辞退するとも・・・」

聴濤「そのとおりです。調停という闘いの場に、我々が共産党をはずしてのぞんだとあつては、足元をみられます。いや、戦闘能力の可能性を自ら小さくすることになる」(しばらく沈黙) 団体代表二「たしかに、正論です。で、読売さん内部の空気は・・・共産党を代表に加えたら、読売が、共産党を支持しているようにとられ、営業政策上まずい・・・でしたか、読売さんの反対派の論拠は」

鈴木「本当にもう、お恥ずかしい限りです！」(暗転)

カレンダー『十一月二九日(木曜日)午前』

明るくなると引続き会議室。鈴木ら最高闘争委員会のメンバーは変わらず常任委員たちが居並ぶ。

文選工松尾「いつまで続けるつもりですか。もう四日目ですよ。うんざりだ」

社会部和多「どこがどうなっているのやら、整理して下さい」

志賀「ええと、一五団体におはかりした。社会党が間に入ってくれて共産党を入れたら、ということになった」

文選工松尾「聞き飽きた。何べん同じ説明聞けばいいんだ」

志賀「が、最高闘争委員会では、東京交通労組の島上善五郎さん、社会党の加藤勘十さんを加え、候補者を五名として常任委員会にはかりました。結果、聴濤、鈴木、島上、の三名になった」

和多「それでいいじゃないの。そう決めたのだから」

志賀「で、聴濤さんの了解を求めにいった」

小河内「いつも聴濤さんなんだよ、こんな時。話がこじれる」

須賀「島上さんは社会党员だが、労働界代表ということで説得に当たりました。しかし聴濤さんは・・・」

鉛版工奥井「だから、聴濤さんはずすか、共産党はずすか、どっちかだろう。ことははっきりしてるんだ」

鈴木（執行部の席から大声で）「聴濤さんはずせません！」

鉛版工奥井「私はずせといつてません。共産党に入ってもらうほかない、といっているのです」「反対」「異議あり」「また振り出しに戻った」

鈴木「私に言わせて下さい。私は、皆さんの決定に従って行動しています。しかし、聴濤さんが正論だと思っています。正論には、侵しがたい輝きがある。聴濤さんに我々の論理を押しつけることは、その輝きを消せということです」

舞台袖の聴濤にスポット当たる。中央に移動しながら

聴濤「先日、あなたがた読売従業員組合は、調停委員会委員の東京都の人選に抗議しました。それは、その労働代表が、真に日本の労働運動を代表しないという点でした。今、読売争議のために最大の誠意と組織力を示している政党は、共産党です。それと社会党。それ以外に政党としてはない。社会党は選ぶが共産党はボイコットというあなたがた読売労働者の態度には、根本的矛盾がある。かたや労働者の敵を追及し、かたや労働者の味方をボイコットする。共産党への警戒心は、権力が作り出したもの。権力と闘うべき我々は、偏見のない、真っ白なカンバスに自らの真実を描かなければなりません」

闘争委員たちそれぞれの表情で熱心に聴いている。暗くなりふたたび聴濤にスポット。

聴濤「社会党一本槍に執着するのではなく、共産党を加えることによって一党に偏しているものでないこと、より広範な大衆の支持の上に立っていること、それを天下に示すことができず。この調停は、新しい戦後日本のファーストケースになる。ファーストケースで共産党をはずせば、以後、あの読売だつてはずした、そうなりますよ」（明るくなる。闘争委員たちそれぞれに聞いている）

聴濤「個人的感情が許されるなら、私は、真の協力者を必要としているということです。争議にも労働運動にもまったたく経験がない私には、考えられる最強のメンバーが必要なのです。私が孤立するようなことの絶対にならないような」（溶暗）

カレンダー『同日夜』

同じ会議室。同じ人物配置。鈴木ゆっくり立ち上がる。

鈴木「民主主義は、正論を恐れない。天皇の時代の偏見を、民主主義の戦いに立ち上がっている我々が引きずってどうするんです。自らの良心に問い、納得できる正論をまっ正直に受け止める。正論の実行こそ民主主義の実現であるはず」

「議事進行」「採決」「もうしかたがないよ」など、雰囲気は採決に向かって動く。しかし「待て」「討論続行」「採決反対」の声も起こり「いつまでやらせるんだ」「いいかげんに



しろ」「黙れ」「なにを」など、混乱して来る。

武藤「(何やら決心して立ち上がる) 発言。私にも発言させて下さい。この問題は、最重要問題です。だから、急ぐべきでない。最高闘争委員会、常任委員会の全員一致制で決めるべきです」

「そうだそうだ」と賛同者がある。

和多「しかしだよ、聴濤氏の主張の線で、全員一致なんてあるわけない」

武藤「だから、時間をかける。できたら聴濤氏に納得してもらおう・・・」

鈴木「それは正義に反する！ 逆にいいましょう。共産党をはずすことで全員一致がありますか。どうですか、武藤君」(にらみつける)

武藤「ええ、いえ、ですからもう一度、もう一度、いえ何度でも聴濤さんに・・・(絶叫) 満場一致で」

宮本ほか数名の記者駆け込んで来る。

宮本「仕事の話ですみません。明日、増ページできませんかね。重要法案が三つ発表になるそうです。どうしても、全文載せたい。労働組合法、農地調整法、選挙法改正案・・・」

印刷工たち「四ページにしろだ」「本気かよ」全員、浮き足立って・・・溶暗。

輪転機回る轟音が響く。

スクリーン・・・輪転機が回る画面。次の文字かぶさる。

「市内版四ページ五十万部を朝日新聞が印刷する。朝日の組合員が讀賣の生産管理を応援しよう」と

## 第十八景 同じ会議室

カレンダー『一月三〇日正午』

照明、明るい真昼。前景の出席者、会議中のストップモーション。

議長(武藤)の声が響く「この九日間討議を重ねて参りましたが、經濟部闘争委員から出されました討論打ち切り動議、工場関係の全闘争委員、企画局、調査局ほかの闘争委員の賛同があり採決、可決。引き続き、調停小委員会委員に、聴濤克己氏、鈴木茂三郎氏、袴田里見氏を委嘱するの件、採決の結果、七〇対三〇で可決・・・」(ウオーという歓声とともに人々、動きを取り戻す)

声「議長、発言。かくなる上は、今日までのすべてのこだわりを捨て、団結固め、不退転の気構えで調停に臨むこと、この場で確認したらいかがでしょう」

ワツと上がる賛成の声。

議長(声)「満場一致。わだかまり捨て団結、確認します」

◇音楽。握手しあい、抱き合い、笑い合い、拍手し・・・(拍手続く中・・・溶暗)

カレンダー『一二月三日』

狭い応接室。山田専務と正力の二人。正力、両手をつけて深々と頭を下げている。

山田「正力社長、どうぞ・・・どうぞ頭をお上げ下さい。・・・そうでしたか。主婦の友社も断りましたか。この大東京、印刷所も、指折り数えるほどしか残っておりませんね・・・」

正力「新聞人である私が、自分の新聞社を乗っ取られ、新聞紙面で社主である私が攻撃される、しかも自分の意見を知らせる方法がない。かくなる上は、自説を印刷物にして売るほかない。胸中おわかりいただけははず。とりあえず十萬部、お願いしたい」（原稿の束を差し出す）

山田「『読売新聞争議の真相』・・・なるほど。しかしうちも、一触即発、今日にも組合ができて、そんな事態で・・・いや、わかりました。・・・印刷屋は、中身をとやかく言う必要はない。共産党の徳田君の依頼でも、受注能力さえあれば引き受ける。それが印刷屋ですか。組合は、説得せねばなりませんまい」

正力（深々と頭を下げる）「感謝します。一日一刻を争います。どうぞよろしくお願い致します」

山田「確かにお受け致しました」

正力「これでようやく、自分の主張を天下に知らせることができ」

山田「・・・おや、号外でしょうかね」（鈴の音が聞こえる）

正力「この正力、今や、号外の中身さえ事前に知らされない。いや、ついぐちが出ました。ハッハッハ」

（鈴の音かぶって）半被姿の号外男が走る。

号外男（叫ぶ）「戦争犯罪容疑者五九名に逮捕令」

音楽。暗くなる。

スクリーン・・・当日の読売報知号外。

正力（声）「十日後には巢鴨刑務所に出頭しなければならぬ。一つだけ覚えておいてもらいたい。組合に経営権の譲歩だけはいかん。もしそういう事態が避けられない時には、社をつぶせ。ためらうことなく。時が来れば、こんな新聞社の一つや二つ、また作ってやる」

## 第二十景 東京都庁会議室

カレンダー『一二月九日（日曜日）第一回調停小委員会 東京都庁会議室』

末弘巖太郎を真ん中に、上手に組合側（聴濤、鈴木茂三郎、徳田球一、鈴木東民、志賀義重、武藤光則）。下手には会社側（鈴木文史朗、品川主税、正力松太郎、小林光政、中満佳親）着席している。

一方に部屋のドアがあり、もう一方は窓。窓には梯子がかかり、ドアと窓の両側から、組合員たちが聴き耳たてて室内をうかがっている。

徳田「共産党の徳田球一です。袴田が病気になるまでね。ところで正力さん、あなたは事態を円満に解決する能力をお持ちでない」

小林「いやはやいきなりの直球攻撃ですか」

徳田「あんたたちもご同様だ。正力さんに助言したり諫めたりするのが重役たちの勤めでしよう。朝日、毎日でやれていることが全然できない」

鈴木茂「そう、朝日も毎日社内改革をなさったでしょう」

聴濤「戦争責任を、社として正式に。紙面でも表明しました」

鈴木東「あたり前の、まったく初歩的なことが、できない」

徳田「事態を民主的に解決していく能力をお持ちでない、ということは、新しい時代の経営者として失格というほかありません」

正力「無能結構。私は、諸君とは立場が違う」

末弘「立場は違っても、従業員の意見を聞く。朝日も毎日そうですよね」

聴濤「ええそのとおりです。聞く気があるかないかが、経営者の資格でしょう」

末弘「朝日毎日とどこが違うのか、お考えになったこと、おありですか」

正力「よそはよそ、うちはうち、です」

武藤「うちは、頑強が過ぎるんです!」

ドアで仕切られた廊下や窓の外から「労働者の敵」「弾圧の張本人」などの野次がとぶ。

小林「組合が偏狭なだけではないの」(室外に大勢の組合員。嘲笑起こる。偏狭だつてさ。面白れえ)

徳田「正力さん、無能なあんたに、読売は任せられぬ。ここにおける優秀な労働者に任せなさい。

労働者で経営管理委員会を作る。読売新聞を管理し、社内機構の民主化を進める」

正力「委員の皆さんお聞きになりましたでしょう。共産党さんが早速正体あらわした。資本主義を否定し、労働者で会社を乗っとうという政治野望をお持ちだ」

徳田「あなたにどいてくれといっているだけだ。ほかの新聞社は、社長が身を引いた。順調にいつておる。戦争責任感がないあんたに問題がある」

正力「俺に問題あるなら、社員も同罪だ。紙面作ったのは社員だ。俺や幹部を犯罪人呼ばわりして、その後釜に座ろうという野心、それが問題なのだ」

徳田「野心家のあんたには、そんなふうにしか考えられないらしい。少しは反省しなさい!」(室外から、そうだ、そのとおり、と拍手)

末弘「まあまあ、そう大きな声出さずに・・・」

正力「俺は、日本の自由経済全体を背負っておる」

鈴木東「勝手に背負わないでください。迷惑です!」

末弘「ここは、冷静に、冷静に」

正力「俺は命をかけておる」

徳田「なに、命をかけるだと。俺たちの、幾百千万の貴重な命を奪ったあんたが。人民の命は命じゃないんですかい。・・・天誅は必ずくだるんだ。そろそろ思い知らねば」

正力「天誅など関係ない。俺は無罪だ。無実だ。信念を貫く」

徳田「往生際の悪い男。労働者だけの経営管理委員会、認めなさい」

正力「違法だ。資本主義の廃絶を目的とするいかなる手段も認められぬ」

徳田「話にならん。無駄だ。総退場！（聴濤、鈴木東に）退場！退場！総退場！」

退場を促しながら足早に去る。聴濤は、卓上の灰皿を床にたたきつけ、従業員側総退場する。その後を、小柄な末弘委員長、大きな鞆かかえて小走りに追う。

会社側と憤然とした正力残る。

組合員なだれ込み、正力に向かって「ファシスト」「戦犯」「死刑になれ」「社長を辞めろ」「責任取れ」など罵声浴びせる。

小林「こら、何を言うか！」

中満「どけどけ、道をあける！」

激怒して仁王立ちの正力を守って、使用者側、労働者をにらみつけながら・

## 第二一景 東京都労働委員会控え室

従業員側代表及び委員が、徳田を囲んでいる。

鈴木東「経営管理委員会って、いきなり何ですか。徳田さん、我々にも事前に説明しておいてくださらなくては」

鈴木茂「いきなり私もとまどいましたよ。私は、労使対等の協議会が穏当と思ってます。末弘教授は、資本、経営、編集の三者分離をおっしゃっておられる」

徳田「諸君が今実行している管理体制に、名前を付ければ経営管理委員会となる。そうではないですか。今、権力を掌握している機関は、組合の中央執行委員会でしょう」

志賀「社員大会で選ばれた最高闘争委員会です。ただし掌握しているといっても、編集、工場、発送、の工程だけです」

徳田「社員大会で選ばれる。それはおもしろい。やがては、労働時間、賃金、人事、経理、業務、その他経営全般が含まれるようにしてゆく……」

須賀「いいですね。すべての権力を経営管理委員会へ。レーニンみたいに、一度言ってみたいですね、すべての権力をソヴィエトへ。ハッハッ」

聴濤「（志賀に）浮かれている時ですか」

武藤「そうなれば多分、会社閉鎖、つぶす、というでしょうね、正力社長は」

聴濤「そういう挑戦をしてくるんだったら、君たちが全面管理するほかない」

武藤「我々、あくまで戦術として初めたのですが……」

鈴木東「……ここでの調停、どこまで可能なんですかね。期待できる成果は」

徳田「テーブルは、戦場の延長です。戦場で取れていないものは、テーブルでは取れません。取れているものを、テーブルでできるだけ形にして残す。形に残したものを足がかりに、団結強めて民主化の実をあげ、より徹底した民主化へ踏み出す……つまり、これから後が大事なんですよ」

声「会社が全員引き上げていきます」

鈴木東「なに、彼ら、何を考えておるのだ！」

第二二景 都庁会議室

カレンダー『二月一日(火曜日)朝』

朝の雀が鳴いている。(溶明) さっきと同じ調停会場。早朝。人物同じ配置で、疲労極限に達している。正力はかなり元気。徳田は疲れを知らない様子。

徳田「正力さん、あなたの退陣は、これはもうどうにもしようがない。社長は退陣、いいですね。確認しておきますよ。副社長以下全重役並びに全局長の退陣、これもいいですね。うなずきましたね。末弘さん、記録、事務当局にちゃんとらせておいて下さいよ」

末弘「わかっております。正力さん、後になって、『待った』はなしですよ」

正力「結構です。ただし、社長および役員後任人事は私どもにお任せ願いたい」

徳田「なに。任せろ。ここまで来て何事ですか！ 調停をつぶす気ですか」

居眠りしているものもあり、何事が起こったのか見回す。

鈴木茂「つぶすのはいかん」

末弘「正力さん、疲れるようなことというのは、もうやめましょうよ」

正力「人事は協議会に持ち出す。が義務ではないと話がついたはず」

徳田「あんたも相当なペテン師ですな。後任社長を勝手に決めたいために、あんな議論を吹っ掛けたのですかい」

正力「ではない。我々は譲歩した。鈴木東民一派の解雇を撤回する。私にとっては屈辱以外のなにものでもない。だから、これは取り引きです」

徳田「だいたい解雇が無茶苦茶なのです。それを取り引きとは何事ですか。あのような解雇、

絶対に認められない」

鈴木茂「絶対に認められません」

末弘「私からも申し上げます。絶対に認められない」

正力「取り消すといっているのだからもういいでしょう。後任人事は俺がやる」

徳田「今までの話は、そっくり御破算。白紙に戻す。話にならん。退場だ退場。どこまでけしからん男だ。総退場！」(暗転)

第二三景 都庁会議室

音楽。朝。雀、鳴いている。朝の光が満ちている。

カレンダー『二月一日午前八時二〇分』

末弘を真ん中に、労使双方の調停委員と鈴木東、小林、調印の仕草。

末弘の声「(読み上げる) 正力氏は社長を辞するとともに、会社を株式会社に改組すること。

正力氏の推薦する馬場恒吾氏を社長とし、小林光政氏を専務として補佐せしむること。社長と従業員代表とをもってする経営協議会を設置し、編集及び業務に関する重要事項を協議すること。争議を理由とする社員の解雇はすべてこれを撤回すること。社員の待遇改善に関する具体的内容は引続き調停委員会において実情調査したる上、労働協約によりてこれを決定すること・・・」

スクリーン…「鈴木東民は主筆兼編集局長となり『民主読売』時代始まる」

「この日午前八時、正力松太郎、巢鴨刑務所に出頭。以後一年九か月、A級戦犯容疑者として収監される」

音楽。

(溶暗)

## 第二四景 焼け跡の広場

「りんごの歌」変奏曲軽やかに。メロディー、しばらく以下のBGに。

スクリーン…紙面…読売報知新聞社説 一月一二日付け『読売争議の解決』

志賀(読む) 「闘争開始以来まさに五〇日、読売の争議はここに解決した」

片山(読む) 「我らの第一の要求は戦争責任の追及だった」

山主「而(しこう)して正力社長は巢鴨刑務所の戦争犯罪人に指名された」

片山「第二の要求は当然新聞の民主化であった」

志賀「従来新聞は資本家の機関紙であり、人民を抑圧し、欺瞞するところの記事を掲げて人民の声を窒息させてきた」

山主「今や読売新聞社は資本のこのくさびから解放されたのである。我らは公明正大、真の人民の声を遺憾なく紙面に盛り上げ得るといふ新聞史上画期的な成果を獲得したのだ」

志賀「今日以後読売新聞は真に民衆の友となり、永久に人民の機関紙たることをここに宣言する」

プツンと切れるように真つ暗になり、小高い位置に老齡のマリオン。

マリ「久しぶりに日本に来てみましたらどうです。今日日本で羽振りを利かせている人たち、昔日本を滅ぼした戦争責任者たちの子どもや孫たちだというではありませんか。アメリカ軍が占領十か月にもならない翌年の春にはポツダム宣言の実行を投げ捨て、日本を反ソヴィエトロシアの防波堤にしようと百八十度の転換をしました。その恩恵で戦争責任者が息吹き返したんです。そんなお方たちが何十年経った今もあの戦争が正しかったと言い張っている。外国から見たら恥ずかしい限りです。で、あの正力さん、原子力発電の父とも呼ばれている。うで。巢鴨刑務所を無罪放免になって以後、アメリカ政府直轄のスパイ情報機関CIAの非公然工作に長い間協力していたんですって。アメリカの公文書記録が公開されて分かったんです。父はこの争議の翌年、今度はマッカーサーに首を切られ、第二次読売大争議となるのですが職を失います。十年ほど貧乏して故郷岩手県のこの街、釜石市の市長に当選、市長を三期一二年務めます。地元物産市場や歩道の付いた生活道路など街づくりと住民自治に力をいれました。そしてもう一つ、市長自ら先頭に立ったのが街にあった製鉄所の大気汚染、公害問題。・・・いま、津波で奪われた街並と、福島に続くこの釜石の海を、父はどんな気持ち

ちで眺めているでしょう」

スクリーン…釜石の街と海の俯瞰。唐丹村の杉林の中の鈴木東民とゲルトルート連名の横長の墓碑。

消える。

ゆっくり

突然明るくなり、音楽も場面も戻る。

出演者全員が次々に登場して群読となる。

志賀「実を言うとわが読売社内にも戦時中の考え方、正力社長が養成し来たった奴隷根性が極めて濃厚に残存、争議団の内部的危機を招来したことも一度ではない。そのみでなく従業員の手になめた紙面の刷新を著しく妨害した」

群読「闘争は従業員を訓練した」

片山「記者は民主主義革命の意味を始めて体得し、古い考えから解放された。そして昨今見るとごとき明朗進歩的な紙面をようやくにして自主的に現出し得たのである」

志賀「読売従業員が今日の戦果を闘いとり民主人への脱皮を開始したのは、ひたすらに闘いのおかげである」

群読「闘いのおかげである」

志賀「日本の国民は連合国軍から自由を与えられた」

東民「しかしこの自由を確保し、日本の国民を真に民主主義的に再鍛錬し得るのは、国民の下からの闘いのみである」

群読「しかしこの自由を確保し、日本の国民を真に民主主義的に再鍛錬し得るのは、国民の下からの闘いのみである」

群読「下からの戦いのみである」(エコーし、繰り返され・・・)、

音楽高まり・・・幕

(2013.2.8)

### あとがき

1、この作品は、東京大学社会科学研究所資料「戦後危機における労働争議1巻」(73年)、「同2巻」(74年)を土台に構成しました。資料集は非売品です。京都府立総合資料館で見つけてびっくりしました。B5版二段組、合計374ページもある膨大な労作資料集です。

これをお作りになった山本潔先生のお話では、争議に関わった方々をカメラマン同行で訪問し、それぞれがお持ちの資料を撮影、それを分類整理され活字に起こされた、ということでした。活版やガリ版の機関紙、ビラ、速報、オルグ(支援要請行動)班別日程表、東京都労働委員会提出文書、手記、会社派及び中立派配布文書などなど網羅されています。

こんな特別の待遇を受けている労働争議なんて、他に（世界を見渡しても）あるでしょうか。この資料集があったからこそこの「ドキュメント」は執筆できました。資料集として残されたことに敬意を表し、お礼を申し上げます。

その貴重な原資料は埼玉大学経済学部「社会動態資料センター」という耳慣れない名の研究室に保存され、東京大学はマイクロフィルムで所蔵しているそうです。

しかし、フィルムや紙は劣化します。第3章「民主の春」のメーデー（シーン＜34＞）、「青年婦人の差別待遇絶対反対」の**横断幕を掲げた行進**は機関紙『リンテンキ』掲載のもの。1997年にコピーさせて頂きました。既にかなり傷んでいます。戦後史の貴重資料として後世に無事引き継がれることを願うばかりです。

**2**、私事になりますが筆者は1959（昭和34）年新卒定期採用で開局2年目の読売テレビ（本社大阪・読売新聞資本傘下のテレビ放送局・日本テレビ系列）に入社（番組制作部に配属されました。直接の上司、編成局長が田中幸利氏でした。がっしりした体格の、温厚でいささかシヤイなたまには癩癩を起こされることはあってもこちらの意見をちゃんと言えば分かって頂ける方との印象でした。

氏が、敗戦当時読売新聞外報部長。敗戦の年10月争議突発と同時に読売新聞は労組自主発行となりますが、この時の編集委員長―実際の編集・発行総指揮者。そして翌年は出版局長の立場で社内にとどまり会社派武藤業務局長と対決された方だったとは。上記資料ではじめて知りました。インターネットで検索すると氏は46年エドガー・スノー『アジアの解放』を岩村三千夫氏（被解雇者）と共訳で読売新聞社から発刊されています。出版社は異なりますがE・H・カー『平和の条件』の翻訳本も。また、この年12月には『ホームラン』という雑誌を創刊。一時退職されたあとの世過ぎ身過ぎだったのかもしれないかもしれません。お話を聞きたいと思っているうちに長年お住まいの東京でお亡くなりになりました。心残りです。

入社当時はもちろんその後もずっと『読売争議』という言葉だけは聞いていました。が中身は多分誰も知らず、誰も語らない。言葉そのものが社内タブーのような雰囲気でした。

1961（昭和36）年にはわれわれが労働組合を旗揚げしました。旗揚げを準備する隠密グループは『石の会』と名付けました。何があっても石のように口を割らないという意味です。先輩社員たちによる組合結成の最初の試みが、流産したと聞いていましたから。

結成してすぐ、労務部長として読売新聞社から乗り込んでこられたのは読売争議参加組の元青年組合員。そして歴代の社長にはこの資料に反組合あるいは「再建派」として登場される方々の名前があります。ここでは、60年代から70年代にかけて民放各局の中で、「読売テレビは不当労働行為のデパート」と呼ばれていたとだけ記しておきます。

**3**、第二次読売争議は、マッカーサーによる日本最初のレッドページです。レッドページといえば普通は1950年前後、朝鮮戦争勃発・日本の軍備復活のころの全国での共産党員やその同調者の追放指令を指します。しかしそれは敗戦翌年に既に始まっていたのです。

第二次争議の最後の協定書にサインした増山太助氏に、伊豆のお住まいを訪ねて質問したことがあります。鈴木東民ら読売労組は、日本での民主主義の普及という占領政策遂行の先頭にあつたつ、いわば米軍から見たら優等生ではなかったのか。それがなぜ弾圧されたのか、と。

お答えはこうでした。「日本の民主主義化に一生懸命汗水流しているものたちをようくみると、どれも共産党員かそのシンパらしい、と気がついた。マッカーサーにとつては、共産党といえばスターリンの手先、ソ連共産党の指令で動いているとしかみえなかった」

ちなみに、読売新聞社に共産党の支部（当時は細胞と呼んだ）が3人で発足するのが敗戦の年45年11月21日（宮本太郎氏『回想の読売争議』より）。その後12月1日から3日間、19年ぶりの日本共産党大会（第4回）が開かれます。徳田球一書記長はその政治報告でこう述



べています。「占領は連合国によるものであり、占領軍は解放軍である。だが我々はあくまで自主的であり、能動的でなければならぬ。(中略)ソ同盟(ソ連は連合国の一つ)との関係については、各自国の共産主義運動に専心することによって共同するのであって、直接的に連絡することはかえって我々の運動に障害を与えることを考慮せねばならない」(当時の「アカハタ」から引用)。ソ連共産党とは連絡さえしないというのですから、マッカーサーの思い込みは見当違いというべきでしょう。

思いこみといえば、ベトナム戦争でもそうです。ホーチミン率いるベトナムの全土解放を許せば東南アジアに共産革命が次々に起こる。アメリカがベトナム戦争を正当化したいわゆるドミノ理論がそれです。そしていま、大量破壊兵器を持つてると「思い込んで」のイラク戦争。ひよっとしたら全てわかった上での権力行使の口実なのか？ やがて歴史家が断を下すことでしょう。

4、活字でお読みになりたい方は、拙著『掘り起こし 読売新聞争議』(日本機関紙出版センター1997年8月刊 B6版364ページ 1500円+税)があります。

今回ホームページ用に横書きにするにあたって若干の改訂を行いました。最大の改訂は登場人物の全てを本名にしたこと。本名で記録し先人に敬意を表します。

田丸信堯(たまるのぶたか)

〈作者著書〉

「神風はいつ」「コドモ先生の映画会」 偕成社

くもん出版、民衆社から数冊

「映像的復元・掘り起こし」 読売新聞争議1945/46」 日本機関紙出版センター

## 『読売争議』主な登場人物メモ

各人名の○は拙著『掘り起こし・読売争議』での人物名。

鈴木東民(ゴ才) 読売新聞外報部長・論説委員。のち主筆編集局長。組合長。

岩手県出身(1895年9月～1979年12月) 元東京帝大新人会メンバー。東大経済学部卒。23年、大阪朝日新聞入社。26年、電報通信社(現・電通)特派員としてベルリンへ。1935年読売新聞入社。争議10年後1955年釜石市長に当選。3期勤めさらに同市市議1期。市長時代、露天商の陳情を受けて甲子川に屋根付市場を作ったり、山間部に孤立した集落を結ぶ舗装道路を、「歩道のない道路は道路でない」を持論につくった。鎌田慧著、『反骨・鈴木東民の生涯』(講談社文庫)にくわしい。

志賀重義(ト才) 同資料部次長 最高闘争委員会書記長。のち論説委員会幹事

(須賀義一)1905年生まれ。27年福島高商卒。福島毎日新聞入社。労農党福島支部責任者。28年29年の3・15、4・16事件で検挙される。31年読売入社。戦時中も反戦思想捨てず長文連らと正力の『焦土作戦』を批判。争議後1950年まで日本共産党本部長。

坂野善郎 (39才) 同経済部長 第一回闘争実行委員。のち編集局次長

(伴 善男) 結核で亡くした妻の兄が争議最終段階の斡旋者・宇都宮徳馬。1906年生まれ  
1930年京大経済学部卒、在学中社会科学研究会に属し逮捕されたこともある。同年讀賣  
入社。争議後『アカハタ』編集局。

長 文連 (ふみつら 35才) 同論説委員 (経済部) 闘争委員会書記長

(長井文彦) 1910年生まれ。33年東大法学部卒。在学中東大緑会所属。左翼運動に従事し  
て逮捕されたことも。父が元警視總監であった関係もあり33年讀賣入社。争議後、居住地  
(世田谷区)で消費組合運動を。

片山 睿 (さとし 39才) 外報部論説委員 のち調査部長 常任執行委員

(片岡さとし) 1910年生まれ。東京帝大新人会メンバーとして活動中退学処分受ける。共  
産青年同盟書記として同組織の再建活動中逮捕され34年出獄。35年ころ讀賣入社。38  
年人民戦線事件に連座して逮捕され、39年讀賣再入社。争議後、『アカハタ』記者。

山主俊夫 (とよ才) 整理部次長 のち整理部長 最高闘争委員

(山西俊夫) 1905年生まれ。専修大学中退?27年中央新聞で編集局ストを組織。『婦人  
毎日』『国民』を経て33年讀賣入社。42年6月初の南方総局長就任を『戦争に疑念を持  
つ』と就任を断る。争議後、『アカハタ』整理部長。

岩村三千夫 (とよ才) 外報部員 のち出版局・月刊『労働』編集長

(岩間三千夫) 1931年早大政経部卒。中国研究所理事。『三民主義と現代中国』(岩波書店)  
ほか中国現代史著作多数。

宮本太郎 (とよ才) 社会部次長 のち政経部次長 常任執行委員

(田宮一郎) 1910年生まれ。水戸高校(旧制)中退。在学中軍事教練拒否運動で中退。33  
年シンパ事件?で検挙される。35年讀賣入社。争議後『アカハタ』編集局。後に日本共産  
党ハノイ駐在代表など。

増山太助 (とよ才) 経済部記者 執行委員会書記長 のち新聞単一労組副委員長

(松山助人) 1913年生まれ。39年京大経済学部卒。同年4月公募組み第1期として讀賣新  
聞入社。出征して敗戦時は相模原の陸軍病院に勤務。第二次争議時、新聞単一副委員長とし  
て争議に関わる。争議後は、共産党本部勤務(文化部員)に。

渡辺文太郎 (とよ才) 経済部次長 のち讀賣新聞従業員組合執行委員長

(渡 文治) 1910年生まれ。東京外語独文科卒。労農派系マルキスト。在学中荒畑寒村、山  
川均らの影響のもとで労働者啓蒙運動に参加。35年讀賣入社。敗戦後、東交の島上善五郎ら  
と連絡を取り組合結成に動く。第二次争議で、『刷新派』委員長。

田中幸利 (50才) 欧米部長 第一次争議編集委員長 のち出版局長

(田中克利) 1958年から60年代、読売テレビ(本社大阪)取締役編成局長。

徳間康快 (25才) 社会部記者 青年行動隊員

争議後、『民報社』(1945年11月30日創刊・論説を柱にした日刊紙。48年11月廃刊)記者。後に徳間書店会長。

山根 修 社会部記者 青年行動隊員 争議後、共産党勤務。後雑誌記者。

吉田玉乃緒 (32才) 社会部女性記者

(女性記者吉野) 争議後、『民報社』記者。

綿引邦農夫 (50才) 文選工 常任執行委員

(綿田国延) 1895年生まれ。小学校卒。水戸で文選工見習いとなり17歳で上京。18年米騒動で検挙される。大杉栄の「北風会」に参加、29年読売臨時雇い、31年本雇い。戦争中は相互助組織を組織して細々とアナキストの組織を維持した。争議後、「機関紙印刷」文選工。

小林豊一 (32才) 文選課長補佐 読売争議団闘争委員長

(小林豊治) 争議後、あかつき印刷。

布留川桂 (49才) 文選工

(古川文選工) 1986年生まれ。小学校卒。19年、報知新聞在職中「革新会」結成。第一次争議時、読売の工場には布留川4兄弟がいたといわれ、弟信とともにアナキストの組織を守り、工場内の運動を組織した。

松井浩平 (26才) 文選工 青年行動隊

飯島正太郎 (25才) 文選工 青年行動隊

奥田吉男 (28才) 鉛版工 青年行動隊

宮沢靖二 (30才) 輪転職場

印刷工場の「自主退職者」の多くは、争議後あかつき印刷へ就職した。

聴涛克己 (41才) 朝日新聞論説委員 新聞通信放送労組委員長 産別議長

香川県(1904年1月〜1965年8月)。25年関西学院大卒。27年、朝日新聞入社。ロンドン支局長、欧米部長論説委員。46年、産別会議初代議長。48年朝日新聞退社。

資料部 田口もも (27才) 著者架空人物

正力松太郎（80才）有限会社讀賣新聞社社長

富山県出身（1885年4月～1969年10月）東大独法科卒。1912年内閣統計局入局。13年警視庁警部。17年牛込神楽坂警察署長。23年警務部長。24年、虎の門事件（難波大助が当時の摂政裕仁に発砲）の責任とって退官。財界の援助で讀賣新聞を買い取り社長。34年大日本東京野球倶楽部（後の巨人軍）創設。44年貴族院議員。45年12月A級戦犯容疑で拘留。47年7月釈放。51年8月公職追放解除。53年日本テレビ放送網社長。54年読売新聞社主。55年、衆議院議員。第3次鳩山内閣北海道開発局長。57年内閣国家公安委員長、科学技術庁長官、原子力委員長。

馬場恒吾（71歳）讀賣新聞社社長

岡山県出身（1875年7月～1956年4月）東京専門学校英語政治科中退。1900年ジヤパンタイムズ入社。09年渡米。オリエンタルレビュー編集長。14年『国民新聞』。同編集局長。24年、大衆党顧問。45年末、讀賣新聞社長。49年日本新聞協会会長。

小林光政（80才）同専務取締役（正力社長の大番頭）

（古林光政）栃木県出身（1892～1962）。東大独法科卒。内務省、朝鮮総督府を経て1924年特高課長から讀賣新聞総務局長。25年退社。文部省教学局長官。41年報知新聞副社長。42年讀賣新聞専務。43年、大政翼賛会総務局長。

柴田秀利 渉外部員（29才）

（柴戸渉外部員）愛知県出身。1917年7月～86年11月。40年青山学院大学英文科卒。報知新聞入社。41年応召。陸軍少尉で中国出征。42年病氣帰還、応召解除。讀賣報知復帰。敗戦を機に一時身を隠す。45年の第一次争議の後、GHQ担当記者。48年NHKニュース解説者。49年讀賣新聞退社。51年以降テレビ放送開設に関わる。57年、日本テレビ放送網（NTV）取締役。67年同専務。68年同退社。（柴田秀利氏ホームページより）

武藤三徳（80才）經濟部次長 最高競争委員 46年2月次長から業務局長。第二次読売争議時会社側交渉窓口。

（牟田六則）日大法学部卒。1939年讀賣新聞公募一期生入社。46年、32歳で業務局長。48年、常務取締役。50年、讀賣ジャイアンツ球団会長。51年依願退職。52年衆議院選挙（岡山）立候補落選。以後、桜菊会理事長。72年、59歳で没。